

第64集

# 研究紀要

三好教育研究所

令和5（2023）年度

## ごあいさつ

冒頭にあたり、1月1日に発生した令和6年能登半島地震により、犠牲となられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災された数多くの皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

また、被災者の救済と被災地の復興支援のためにご尽力されている方々に深く敬意を表すとともに、被災地域の日も早い復旧と復興を衷心よりお祈り申し上げます。

さて、日頃は三好教育会の振興にご支援ご協力いただき、深く感謝申し上げます。本年度は、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが「5類」に移行し、三好教育研究発表会も4年ぶりに参集開催をすることができました。発表会では、馬路小学校からは「小規模校の特性を生かした教育活動の推進～他校とのオンライン学習の実践を通して～」、井川中学校からは「変化する社会の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～」として取り組んでいただいた研究成果を発表いただき、先生方の今後の教育活動に大いに参考となることと思います。また、講演では、「ほめ言葉のシャワー」が成立する教室をつくろうという演目で教育実践研究家の菊池省三先生に講演をいただきました。教える行為の一番の土台となる授業観について、「学習意欲」を重視する考え方に立った「対話・話し合い」を大事にする発想が、今、求められていることを教えていただきました。これらの学びが、これからの学校運営に活かされ、学校現場がさらに活性化することを期待しております。

話は変わって、最近思うことを少し書いてみたいと思います。それは、AI時代が到来し、教育現場も大きく変わろうとしています。10～20年以内に、現在ある多くの仕事がAIやロボットによって代替される可能性が高いと言われる昨今、未来の子どもたちにどのような教育を受けさせればいいのでしょうか。理解度や興味・関心の異なる子どもに同じ授業を一方向的に受けさせて、一斉テストを課すという現在の横並びの能力評価システムは、これからのAI時代にフィットしていないと考えます。生成AIの飛躍的進化は、目の前の風景を塗り替えつつあります。生成AIが私たちの日常生活であたりまえのように使われる社会において、人間に求められている力とは何でしょうか。それらをしっかりと見極め、進んでいく方向を考えていかなければならない時が、もうすぐそこに来ているのではないのでしょうか。

未来に必要な資質には、柔軟性、創造性、協力能力、情報リテラシー、問題解決能力などが含まれています。そして教師には、技術を上手に活用できるデジタルリテラシー、柔軟性と独創性を発揮する能力、子どもたちの異なる学習スタイルに対応する適応力が必要です。また、子どもの個別のニーズに焦点を当てたカスタマイズされた指導が求められ、コミュニケーションや協力スキルも重要となってくると思います。

社会の構造的変化により、みんなと同じことができること以上に他者との違いに意味や価値がある時代にあっては、子どもたちの特性や関心に応じてその力を引き出す学びへの転換が求められているのではないのでしょうか。そして、このことが学習指導要領改訂において主体的・対話的で深い学びの実現のための指導方法の改善が重視された背景となっているように思います。

終わりにりましたが、本研究紀要の発行にあたりまして、ご指導、ご助言いただいた先生方、研究協力校並びに委嘱研究員の方々、三好教育研究所の皆様、そして関係各位に心より感謝申し上げますとともに、会員の先生方の教育活動が今後ますます成果の上がるものとなり、ご活躍されることを祈念して、ごあいさつといたします。

令和6年3月

三好教育会長 大畑 知

## 目 次

あいさつ

三好教育会 会長 大畑 知

### —— 研究指定校研究 ——

- 小規模校の特性を生かした教育活動の推進 ..... 1  
～他校とのオンライン学習の実践を通して～

馬路小学校 教諭 中山 祐子

- 変化する社会の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方 ..... 11  
～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～

三好市立井川中学校

### —— 教育研究所研究員研究 ——

- 外国語学習から『学級づくり』 ..... 22  
～外国語の特性であるコミュニケーションを生かして～

三好教育研究所 研究員 リーデル 章代

- 主体的に運動する子どもの育成 ..... 34  
～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～

三好教育研究所 研究員 松本 美穂

- 既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～） ..... 48

## 小規模校の特性を生かした教育活動の推進 ～他校とのオンライン学習の実践を通して～

馬路小学校 教諭 中山祐子

### 1 はじめに

本校は愛媛県四国中央市よりの、三好市最西端の小規模校である。山間部だが、学校南側を国道が走り、交通の便が良いため、馬路地区に生まれた子どもが保護者の仕事等の都合で、近隣の小学校に通うことも多い。毎年の入学生が少人数であるため、馬路地区に学校を残したいという地域の方々の強い思いに支えられている。

本校児童は、男女分け隔てなく一緒に遊んだり、学年の枠をこえて仲よく過ごしている。しかし、お互いをよく知っていて、固定化された人間関係の中で生活しているため、しっかりと相手の話を聞こうとする態度や、自分の考えを相手に分かりやすく伝える表現力が十分に育っているとは言えない。

そこで、昨年度から、研究主題「小規模校の特性を生かした教育活動の推進」を実現するため、全教職員の共通理解のもと取り組んできた。人権教育や特別支援教育を中心に据え、自分や周囲の人々の価値に気づき、豊かな表現力を身につけた児童の育成に努めているところである。

### 2 研究の概要

本研究を進めるに当たり、本校児童の実態をあらためて把握し、解決すべき課題を明確にするため学校生活アンケートを実施した。

その結果をみると、「いろいろな地域の体験学習は、好きですか。」「ふるさと馬路が好きですか。」という質問に100%の児童が「はい」と答えていた。また、振り返りの感想には「地域の方が、分かりやすくていねいに教えてくれたおかげでうまくできました。」といった内容が書かれていた。

本校では、「米作り体験活動」や「サギソウ栽培活動」「馬路小・合同市民運動会」「グラウンドゴルフ」といった地域体験学習を何年も前から継続的に行っている。



米作り体験活動



サギソウ栽培活動



馬路小・合同市民運動会



グラウンドゴルフ

そういった長年にわたる活動を通して、自分を支えてくれている方々への感謝の気持ちやふるさとを愛する心情は着実に育ってきている。

その一方で、「友達のいろいろな発表を聞いて、なるほど、すごいなあと思ったことがありますか。」「みんなの前で発表することは好きですか。」という質問に「はい」と答えた児童は、ともに60%程度だった。このアンケート結果をもとに、本校児童の学校生活を全教職員で検証したところ、次のような課題が明確になった。

- (1) 多様な意見にふれることが少ないため、自分の考えが深められず、学びに広がりがない。
- (2) その場で考えた意見を、自信を持って発表することが苦手である。

つまり、「意見の多様性にふれること」「発表力」に課題があるということである。

普段の授業においても、少人数であるために、多様な意見にふれることが少なく学習内容を深めることができにくく、特に、思考を必要とする学習では、教師の一方的な指導になりがちになる。また、自分の意見や考えを持っていても、自信が持てず発言できない場面がよく見られる。

そこで、他校とオンラインでつないで合同学習ができないかと考えた。他校とのオンライン学習は、自校の枠をこえて、より多くの子どもたちと学習できるため、本校の課題を解決するためには有効な手立てとなる。また、オンライン学習に慣れれば、気軽にしかも頻繁に合同学習ができる。

そういった経緯から、研究のねらいを

オンライン学習を通して

- ①多様な意見にふれることで、自分の考えを深める。
- ②発表力を育成する。

と設定した。

本研究を進めるために、毎年、交流（合同）学習を行っている近隣校の白地小学校の協力を得て実践を重ねた。

なお、本校では、即座にオンライン学習を実施するだけの知識と経験が十分でなかったため、オンライン環境の整備についての内容を交えての実践報告となる。

### 3 実践

#### (1) 低学年（1・2年生）の実践

##### ①第1回 国語（1・2年生）

初めての合同学習ということで、一人一人が自分のタブレットを操作し、自己紹介から始めた。1年生には昨年度まで保育所で一緒だった友達もいて、とても嬉しそうにタブレット画面を見ていた。自己紹介後に、1年生の国語単元にある夏休みの思い出発表を行った。発表自体はとてもスムーズにでき、白地小学校の子の様子もよく知ることができた。1年生は徐々に顔を見る友達がいることが嬉しかったようで、授業の後にも「〇〇ちゃんがおったなあ。」など、みんなで楽しそうに話していた。

ただ、授業の内容よりも、ハウリングが起こるなどして ICT 機器利用の工夫改善を強いられた。また、馬路小学校と白地小学校の1・2年生を合わせると14名となり、全員が自己紹介をして、その後に発表するのは時間的にも少し余裕がなかったことも課題となった。さらに、1年生はタブレットに自分自身が映るといことが楽しく、発表を聞くことよりも映る自分が気になってしまう児童もいたため、やはり、事前の準備や指導がとても大切だと感じた。(写真①～③)

##### ②第2回 算数（1年生）

白地小学校には2年生がいないことと、前回の時間的な面での反省を踏まえ、2回目以降は1年生だけの合同学習となった。そのため、同学年での教科学習が可能となった。そこで今回は、算数単元「かたちづくり」で色板を使って自分たちがつくった形を発表することにした。算数ボックスに入っているホワイトボードに、色板をくっつけてタブレット画面に映し出し、自分がつくったものを発表した。オンライン授業では、本校児童の4人だけでは出てこなかったかたちを見ることができ、子どもたちも教師も、新たな発想と刺激を得ることができた。算数の発表後に少しだけ時間が余ったので、お互いの学校についてのクイズを教師が出し合った。子どもたちは、白地小学校について知らないことがたくさんあり、白地小学校への興味が増したようであった。授業後に、算数のかたちづくりについて子どもたちと話をすると、「〇〇くんのは馬路小学校にはなかったよ。」とか、「あんなのよう思いつくなあ。」など、白地小学校の友達がつくったものを賞賛する声がたくさん上がった。(写真④⑤)

①



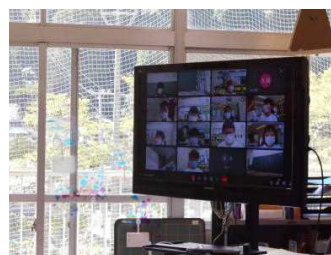
②



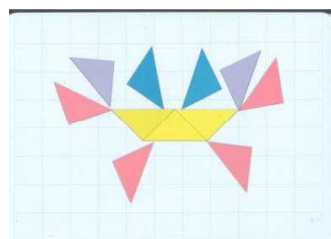
③



④



⑤



### ③第3回 道徳（1年生）

これまで、発表単元を中心に合同学習を計画していたが、子どもたちにより多くの意見に触れさせたいという思いから、道徳の学習をしてみることにした。資料は「かぼちゃのつる」の内容を Google slide で作成したものを共有し、一人一人がタブレットで確認した。教室の黒板も定点カメラで写し、黒板には子どもたちの意見も書いた。

授業では、子どもたちが考えたことを発表する機会を設け、タブレット越しに他校の友達の見聞を聞くことができた。本校児童の中からは出てこなかった意見があり、授業後に話を聞くと、「白地の子はやさしかったよ。」とか「〇〇ちゃんは、『ごめん』てあやまっとった。」など、子どもなりに自分たちとの違いを感じているようだった。まだ1年生ということもあり、相手の意見を受けて、自分の意見を述べるということは行うことができなかったが、今後はオンラインに関わらず、互いの意見に対して考えたことを伝えられるような授業づくりをしておくと、合同学習がさらに意義深いものになると感じた。放課後、白地の先生と振り返りをしたときには、「やはりいつも教室で私たちが言っていることが、子どもたちの意見として出てきている。」というお話をいただいた。より多くの意見に触れられるきっかけにはなるということを確認した。(写真⑥～⑧)

⑥



⑦



⑧



## (2) 中学年（3・4年生）の実践

### ① 1回目 特別活動

1回目の内容は、他校とオンラインで活動をすることに慣れることと、多様な考えにふれることをねらいとして、自己紹介と多様な答えが想定されるクイズを行った。タブレットで全員が Meet に入り、自己紹介の後、人によって違う見え方をするイラストを見て、何に見えるかをチャットに入力していった。途中でハウリングが起きたり、タブレットが繋がらなくなったりもしたが、児童からは「楽しかった。」「またやりたい。」という声が多く上がった。活動後には、両校の教員で振り返りを行った。そして、ハウリングを起こさない工夫が必要なこと、名前が分かるように名札を用意する必要があること、予備機を用意しておくこと、児童同士の交流をもっと増やしたいことなど、2回目の交流学习に向けた改善案を出し合った。(写真①②)

①



②



### ② 2回目 特別活動

2回目は合同学習に向けて児童同士の交流を深めることをね

らいとして、互いの学校紹介を行った。事前に用意しておいた学校に関する〇×クイズを出し合い、予想をチャットに書き込んだ。答え合わせでは、タブレットのカメラ機能を使い、実際に校内を見せながら紹介したり、児童がスライドを画面共有して学校の写真を見せたりした。クイズに答えたり、答え合わせの際には「知らなかった!」「学校広いね。」とコメントをしたりするなど、チャットを活用して積極的にコミュニケーションをとっていた。活動の振り返りでは、チャットに名前ではなく番号が表示されて誰のコメントかが分かりづらいため、コメントと一緒に名前も書く必要があるという意見が出た。(写真③④)

③



④



### ③ 3回目 外国語活動

今回は Let's try! Unit4 の I like blue. で「英語で自己紹介をしよう。」というめあてで合同学習を行った。児童は普段少人数で学習していることから、多様な考えにふれたり、多くの人の前で発表をしたりする経験が少ない。そのため今回は Google slide を使用し、自分の好きな物や苦手な物を英語で伝え合う活動を行った。授業では、めあてをたてた後、自己紹介で使う英語の表現を復習した。その後スライドの作成方法を確認し、20分程度各自でスライドの制作を行い、発表と振り返りを行った。全員が英語で自己紹介をすることができたが、想定よりもスライドを作るのに時間がかかってしまったり、次の人が自己紹介をするまでの間が空いたりしたこともあり、時間がオーバーしてしまった。また、自己紹介のスライドに顔写真を貼ろうとしていたが、Meet を接続しながらカメラを使用できず、スライドに写真を貼れない児童も何名かいた。さらに、画面を共有することや、目の前の児童とオンラインの児童で反応に時差があることに慣れておらず、教師がもたつく場面も多くあった。振り返りでは、「お互いのことを分かってよかった。」「それぞれ好きな物がちがうんだと思った。」といった感想が児童から聞かれた。(写真⑤⑥)

⑤



⑥



## (3) 高学年(5年)の実践

### ① 1回目 外国語

日程決定等は事前にメールで連絡し、簡単に授業展開や準備でお願いすることをまとめたものを作成して送った。また、「ゆびスマ」をする際の独自のルール決め等細かい打ち合わせは、電話で相談し確認を行った。

1回目の内容は、同学年に発表する機会のなかった外国語「英

①





語で自己紹介しよう。」の内容で行った。習得した英語で自分の名前と好きなことを伝え合い、次にそれぞれの学級のメンバーや先生などを紹介した。全員紹介を終えると、オンラインでの交流をより深めるため「ゆびスマ」を行った。人数が多いため、制限時間を設けたり、「ゆびスマ〇〇」と言っている間は、他の人は目を閉じるなど、オンライン独自のルールを決めて行った。実施後、児童からは「自己紹介をするときは恥ずかしかったけど、ゆびスマはおもしろかった。また、会えるのが楽しみ。」「はきはき話することができなかった。」「アイコンタクトはだいたいできた。」「ゆびスマは盛り上がった。」「今度は、算数でオンライン学習したい。」などの感想が出た。

1回目の交流学习を行って、授業者側がオンラインでの交流に慣れていなかったため、最初戸惑う部分もあった。今回、英語での自己紹介等を行った後「ゆびスマ」をしたが、最初に「ゆびスマ」を行い、雰囲気馴染んでから自己紹介を行えば、児童が緊張せずにできたように思う。(写真①～③)

② (ゆびスマ中)



③



## ② 2回目 算数

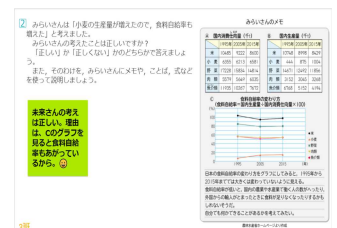
今回は同学年の子と班活動を行い、自分の考えを深めることができる単元を選び取り組むことにした。事前に進捗を確認したところ、丁度良い単元がなかったため、算数でも最後のまとめの学習になる「わくわく算数ひろば」で「表やグラフなどの資料から必要な情報を選択し、食料自給率についての問題を解決する。」という単元で合同学習を試みた。

授業を行うにあたって、事前連絡の一つとして授業展開を作成し、共通理解をはかった。また今回は、班に分かれて話し合う場を設けたかったため、jam boardを使用し各班での話し合いや振り返りが行えるようにした。授業を行うにあたって、jam board 使用が適しているのか、また、児童が操作できるのかを確認するため簡単な質問をし、jam board を使用するための接続テストを行った。(写真④)

④

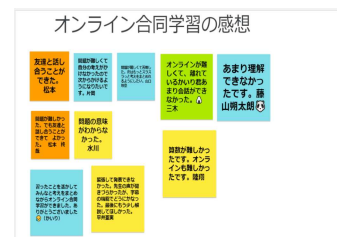


⑤



授業内容は、算数のまとめの学習『わくわく算数ひろば「みらいへのつばさ」』の単元で行った。教科書にあるみらいさんのメモの表やグラフなどの資料から必要な情報を選択し、食糧自給率についての問題を解決することをめあてにした学習である。問題1は各自で取り組み、問題2からは3つの班に分かれて話し合う活動を取り入れた。実際に授業をしてみると、国産消費仕向量等聞き慣れない言葉があったため、児童からは「問題が難しかった。」「問題の意味がわからなかった。」等の感想があった。中には「習ったことをいかしてみんなと考えをまと

⑥



めることができた。」「問題は難しかったけど、友だちと話し合うことができた。」等の感想もあった。時間を気にしながら授業を進めてしまったので、説明不足になった部分もある。今後も合同学習をする際には、しっかり時間を確保し、一つの話し合いに焦点を当てていきたいと思った。(写真⑤⑥)

①



#### (4) 全校での実践

10月に、運動会で披露した鼓笛演奏とダンスを両校がオンラインで発表し合った。本校の子どもたちの感想は、「すごい。」「格好良い。」「かわいい。」や、「自分たちと同じだ。」など、1年生でも、自分から手を挙げて発表することができた。白地小学校からは、演奏がそろっていて上手だったこと、一人一人の顔が見られて良かったこと、ダンスのキレが伝わっていたこと、1年生のポンポンダンスがかわいらしかったことなど、うれしい感想ばかりで、子どもたちの達成感を満たしてくれた。(写真①②)

②



#### (5) 実践を終えて

以上がこれまでに行ってきたオンライン学習だが、全体を通して問題となったのが、音の環境問題である。どの学級も、第1回目はハウリングに悩まされたが、2回目以降はマイクスピーカーを使うことで解消された。また、オンラインにどうしても生まれてきてしまう時間差に、子どもも教師側もやりづらさを感じた。自由な発言が生まれにくかったり、つぶやきを拾いにくかったりと、いつものテンポ感では、うまく進めにくいところが多くあった。これには、教師側の慣れが求められる。

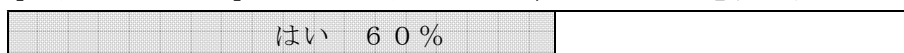
その一方で、オンライン学習は児童にとっても教師にとっても特別感のあるものになっているからこそ、他者を意識した発表や態度が見られるといういい面も見られた。このいい面を最大限に生かして、子どもたちの力を伸ばせていけるよう、今後も取り組みを続けていきたい。

## 4 成果と課題

(1) オンラインを通して「多様な意見にふれ、自分の考えを深める。」ことについて

### ① アンケート結果

【事前アンケート】「いろんな友だちから、たくさんの意見が聞けていますか。」



【事後アンケート】「オンライン学習では、いろんな友だちから、いつもよりたくさんの意見が聞けましたか。」



「多様な意見に触れ、自分の考えを深める。」というねらいに関して、オンライン学習

を行う前のアンケート結果では、「いろんな友達からたくさんの意見がきけていますか。」という問いに、60%の児童が「はい」と答えていた。オンライン学習後に「オンライン学習では、いろんな友達から、いつもよりたくさんの意見が聞けましたか。」という問いに、92%の児童の児童が「はい」と答えていた。

#### ②理由

その理由として、子どもたちからは、「白地小学校と馬路小学校の人数を合わせると多くなるので、いつもよりもたくさんの意見が聞けた。」というものが多かった。子どもたち自身も、人数が多くなると、その分多様な意見が出てくるということを感じていた。

「白地小学校」と「馬路小学校」の人数を合わせていっ  
はいの人がいて、いつもよりたくさんの意見が  
聞けたからです。

#### ③児童の感想

オンライン学習では、白地小学校のみんなの意見がたくさん聞けました。自分と同じような意見もあれば、ぜんぜんちがう意見もあって、いろいろな考え方があったなと思いました。

#### ④考察

他校とオンラインでつなぐということは、学習する児童数が増えることであり、必然的により多くの児童数の学級を設定することができるということになる。そして、自校の少人数学級だけで学習するときよりも、意見を交わし合う機会が増え、自然と多様な意見にふれることが多くなる。それによって、自分の意見に確信が持てたり、友達の意見を取り入れたり、全く違う意見に修正したりする等、友達の意見と比較しながら思考する中で、自分の考えを深めることができる。アンケート結果や児童の感想、授業中の様子から、そういったことが、オンライン学習を通して実現できたと言える。今後は、その成果を十分に生かしながら、継続してオンライン学習に取り組んでいきたい。

### (2) オンライン学習を通して「発表力を育成する。」ことについて

#### ①アンケート結果

【事前アンケート】「進んで発表できていますか。」



【事後アンケート】「オンライン学習では、進んで発表できましたか。」



「発表力を育成する」というねらいについて、オンライン学習前は「進んで発表できていますか。」という問いに対して50%の児童が「はい」と答えていた。オンライン学習後では、「オンライン学習では、進んで発表することができましたか。」という問いに67%の児童が「はい」と答えている。

## ②児童の感想

思いついたことがあって発表  
しようと思いましたがきんちょうして  
なかなか発表することができませんで  
はつきはがんばって発表したいです。

## ③考察

このアンケート結果をみると、進んで発表できたという児童の割合がわずかに増えた程度であった。オンライン学習に対してのとまどいや、授業中、積極的な発表を促すことができていなかったこと。コロナ禍で交流活動にブランクがあり、何でも言える雰囲気十分でなかったことなどが、この結果に反映していると思われる。

今後、jam boardなどを活用しての付箋学習も多用しながら、ねらいに対する目的意識をしっかり持って、オンライン学習を通じた発表力を育成していきたい。

## 6 おわりに

本研究では、オンライン学習を通して、本校児童の課題を解決しようと試みた。その中で、オンライン環境を整備することや学習の進度に違いがあり、実施する教科や単元、内容等が制限されることが、他校との合同学習をやりにくくしている一つの原因であると考えられる。

また、オンライン学習を成立させるためには、交流先の学校長の承認が得られることや両校の課題意識に重なりがあること。交流先の学校の教職員に、実施する意義の理解と賛同が得られることや担任同士の良い関係性と意思疎通が必要であることなども重要である。

これらの条件がクリアでき、オンライン学習が実施できれば、本研究の成果に見られるような効果は必ず得られると考える。今後とも、残された課題解決に向けて、小規模校、少人数の学習が少しでもよりよいものなるように、継続してオンライン学習の可能性を探っていきたい。

# オンライン合同学習の手順

## 1. 用意するもの

### 【教員】

- ・タブレット（画面を共有するなど、教師として操作する用）
- ・会議用マイクスピーカー
- ・学習者用パソコン（児童にどんな画面が見えているのかを確認する用）
- ・テレビ（児童が Jam board など他のアプリを操作中にも Meet の画面が見えるようにするため）

### 【児童】

- ・一人一台のタブレット（児童一人ひとりの顔がしっかり映るようにするため）

## 2. Meet をつなぐ手順

- (1) 会議用マイクスピーカーを教師のタブレットにつなぐ。(Bluetoothまたは線で)
- (2) 学習者用のパソコンをテレビにつなぐ。
- (3) Google ClassroomからMeetをつなぎたいクラスを選び、左に表示されるMeetに「参加する」をクリック。
- (4) 「今すぐ参加」を押す前に、マイク、カメラ、音量を確認する。

教師のタブレット                      マイク **on**    カメラ **on**    音量**出す**

教師の学習者用パソコン              マイク off    カメラ off    音量 0

児童のタブレット                      マイク off    カメラ **on**    音量 0

- (5) 「今すぐ参加」で参加すると、児童の声も教師の声も会議用マイクスピーカーのマイクが拾い、相手校の音も会議用マイクスピーカーから出るようになる。

## 3. その他

### ・ハウリングをする場合

→児童と教師の学習者用パソコンのマイクと音量が off になっていることを確認する。

### ・音が出ない場合

→「その他のオプション」⇒「設定」⇒「音声」でマイクとスピーカーが会議用スピーカーになっていることを確認する。

→タブレット本体の音量が off になっていないか確認する。

→画面左下のウィンドウズマーク⇒「設定」⇒「システム」⇒「サウンド」でスピーカーとマイクが会議用スピーカーになっていることを確認する。

### ・カメラが映らない場合

→タブ上部の URL 左の鍵マークをクリックし、カメラの権限が on になっていることを確認する。

## 変化する社会の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方 ～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～

三好市立井川中学校

### 1 はじめに

令和2年4月、教育界では、教職員の超過勤務時間についての課題が議論されており、様々な働き方改革の取組が手探りでされている状況であった。また、コロナ禍の始まりのときであり、入学後すぐに、生徒達は登校を控え自宅待機を余儀なくされる状況であった。混乱した学校現場であり、いやが応にも臨機応変な学校運営をしなければならない状況であった。

本校でも、生徒はコロナ禍で登校できず、教育課程さえ完全に実施できるのかわからないピンチの状況であり、生徒や教職員の健康や安全を維持するとともに、学校目標である「知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を育むとともに『生きる力』を身につけた生徒の育成」の具体化について悩んでいた。しかし、私たちは逆にチャンスと捉え、この機会に学校のあり方や取り巻く人々の教育活動への意識改革、生徒や教職員が新しい風を感じる学校運営をしたいと考えた。

### 2 本校の概要と課題

旧井川町で、唯一の中学校であり、井内・辻・西井川の3地区が校区となる。井内小学校が休校になり、辻小学校と西井川小学校との2校より入学する生徒がほとんどであるが、校区外からの登校を希望する生徒もいる。一方、希望する部活動がないなどの理由から、中学校への進学を機に、校区内から他の中学校へ転出する生徒も少なくない。

地域の人々や保護者は、井川中学校を誇りに思っており、協力的である。また、いつまでも変わらず存続してほしいと願っており、自分たちが在籍していた頃の、大人数の学校のあり方をよしとする者もいる一方、少子高齢化の中で学校の将来を心配する者もいる。だが、固定された人間関係の中で、変化を求める声は出しづらく、現状維持に流れやすい状況にある。

### 3 SWOT分析

学校運営協議会の意見も参考に、私たちはSWOT分析をしてみた。学校としての弱みは、地域・保護者・生徒とも固定化された人間関係の中で生活しており、何事においても変化をするには大きなエネルギーが必要な点と、人間関係などがそれなりに安定しているために、大きな変化をすることを言い出しにくいことである。強みは2点で、少人数のため、一度話がまとまると一致団結して目的をかなえることができる点と、臨機応変な対応が可能である点である。

分析した結果は、『地域の人々や保護者の望む時代の変化に耐え、存続できる学校のあり方としては、競争優位性が発揮しやすい「機会」×「強み」＝「積極戦略」が理想』であった。積極戦略が成功すると、ポジティブな影響の波及や、生徒の自主性や創造性の伸びが期待できる。そこで、費用対効果の優先度の高いものから取り組み、「持続可能」をテーマとした学校運営の改革を推進していくこととした。

#### 4 研究の概要

地域の願いである『井川中学校を存続させる』ためには、「小規模校の利点を活かすことと、教育活動が何を目標しているかが明確に伝わること」の共有が急務であった。そこで、以下の2つを学校運営における改革の中心課題とし、研究を進めることにした。

##### (1) 教育活動の改革

学校教育目標の副題として「～将来社会の一員として自立した人間となる為の基礎づくり～」を加え、中学校時代をその期間として捉えていることを示した。その中で具体的に身につけさせたい力として4つの力を上げ、その向上の手立てとして以下の2つの柱を示した。

- ① キャリア発達を支援する教育の創造～キャリア教育的視点で取り組む体験活動の実践～
- ② 自他の人権を共存する心の育成

協働して学習を進めるにあたって、②の自他の人権を共存する心の育成がベースになる。その中で体験活動を通して自らのキャリアアップを図るとともに、成長する中で新たな人間関係が構築されていく。すると、再び自他の人権の共存を深めていく必要がでてくる。このように、2つの柱がスパイラルに絡み合っ、生徒が成長していくことを期待した。

##### (2) 教師の働き方改革とPTA活動の改革

教職員の超過勤務時間の上限が示され、勤務時間外に活動する部活動と、夜のPTA各会への参加は、働き方改革の課題であった。保護者の中には、小中2つの学校でPTA活動に参加する方もおり、「少人数なので欠席もできず負担を感じる」という声もあった。PTA活動のスリム化と、小中での活動時期の集中をさけることは、改革の優先度が高かった。

(1)(2)の改革を進めることで、どのような力をつけさせるかを共有でき、それぞれの活動の目的が理解されやすい点と、学校にも家庭にもゆとりが生じ、生徒と関われる時間ができる点が大きなメリットとなると期待できる。その効果は、生徒や保護者・教職員のアンケート結果や学校運営協議会等での意見にも現れ、評価できると考えた。

#### 5 実践するにあたって

実践するにあたって、以下の3点に気をつけた。

- (1) 中学校生活で、身につける力を示し意識させる。
- (2) 生徒や保護者・地域の意識をポジティブにする。(内的動機付けを高める)
- (3) 関係者に具体的なメリットを感じさせる。

(1)については、令和2年4月より、以下の「井川中学校に入学にあたって」を配布した。

//// 枠内は、その内容である。

(2)(3)については、生徒にも保護者にも地域にも一度に示せるものから改革を始めると、より効果が得られると考えた。

井川中学校では、校訓「自主・創造」のもと「知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を育むとともに、生きる力を身につけた生徒の育成」を教育目標とし、「キャリア発達を支援する教育の創造」を推進しています。

わかりやすく言うと、皆さんには、これからの社会の中で、自らの可能性を伸ばし、多様な人々と協力して働いたり、豊かな人生を自らの手で切り拓いて、地域や社会の創り手となってほしいと考えています。そこで、中学校時代を、社会の一員として自立した人間となる

ために必要とされる基礎づくりの時であると捉えて、自分らしい生き方をするための基礎の力を身につけさせるために、体験活動の中で、その力を培おうと取り組んでいます。

#### 《中学生活でさらに伸ばしてほしい4つの力》

##### 自分を「見つめる力」

自らの感情を律して、今後の成長のために進んで学ぼうとする力です。自分の「良いところ」「できること」「意義を感じること」「したいこと」など自分の特性を見つけてください。その力を使って集団の中での自分の役割を見つけてください。また、今後の自分自身の可能性を信じ、逆境に負けず肯定的に捉えて主体的に行動してください。

##### 人と「かかわる力」

積極的に、他者と協力・協働して、より良い集団づくりをしようとする力です。自分の考えとは異なった考えを受けとめ、周りの人の立場を理解して共感してください。自分の考えを押しつけるのではなく、相手の意見を聴いて自分の考えを広い視野で振り返ってみてください。一つの課題に向かってチームワークで解決をしていくスキルを身につけてください。

##### 未来を「えがく力」

働くことの意義を理解し、主体的に自分の生き方を判断していく力です。自分の将来の夢を設定し、その実現のために必要なプロセスを組み立ててください。自らが果たすべき様々な立場や役割、適性を踏まえて「働くこと」をベースに、多様な生き方を計画できるようになってください。

##### 決断し「すすむ力」

様々な困難に負けず、問題を解決していこうとする力です。仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理解決することができる姿勢を持ってください。中学時代は、自分の夢を実現するための適切な進路選択をしていく決断力を身につけてください。

みなさんには、授業や学校行事、部活動などでの様々な体験や学びを通して、これらの力を伸ばし、自らを成長させていくことを意識し活動してほしいと思います。

## 6 実践

### (1) 登校カバンの改革

従来、本校では白の斜めかけカバンで登校していた。早くから、教科書等の荷重が片方の肩に大きくかかるのは健康上良くないと言われていたが、そのままにされていた。そこで、近隣地域に先駆けて登下校の白カバンの廃止と、デイパックの採用を決めた。SWOT分析の結果



である小規模校の特性を活かした積極戦略である。業者との連携で商店の在庫を引き取ってもらい、令和3年4月より令和5年3月までを移行期間とした。その間は令和2年度入学生までは、従来の白カバンと家庭で持っている黒・紺が基調のデイパックを可とした。なお、新たに採用したデイパックはタブレットを安全に持ち帰ることができるスペースを備えている。



この実践では、登下校の様子が一変し、地域へ学校が変化していることへのアピールとなる点も大きかった。保護者や生徒にも、要望しても変わるなど考えてもいなかったものが、変わったという点でも、学校の改革への積極的な姿勢が伝わり、以後の変化への受容と期待が深まったと思われる。また、生徒会で相談を重ねた結果、冬の防寒具の規定も柔軟化した。さらに、個人情報の流出を防ぐ意識が生まれ、名札についても、学校に登校している間だけの着用となった。自分たちが疑問に思ったことや、変えていくと良いと思ったことを提案できるようになり、正規の手続きを経て自分たちに合ったルールへと変えることができるようになった。

## (2) 体育祭の春開催

従来は、あすなる祭として、9月に文化祭の後の日曜日に開催していた。8月下旬から愛校奉仕作業(小・中)、あすなる祭(中)、体育祭(中)、運動会(小)と日曜日ごとにPTAが絡んだ行事が続き、保護者の中には、休める間もない方もおり、負担が大きいという声もあった。

また体育祭は、二学期始めの慌ただしい中での開催で、時節柄、熱中症で倒れ搬送される者もいた。

そこで春開催を提案し、熱中症予防と保護者の負担の分散化を目指した。少人数のために出ずっぱりの生徒の負担軽減策として、午前中開催としてプログラムも絞り、途中給水タイムを2回取り入れた。令和3年度より実施し、現在も継続している。さらに、赤・青の2チーム対抗戦として開催し、保護者との競技や生徒得点に加算される保護者の対抗競技をもうけ、作戦を練って競技を楽しみながら、つながりを深めている。時間は短縮されているが、中身は十分に教育効果も高い教育活動となっている。

令和5年度のテーマは「Show your originality」、副題を「～まだ見たことない青春を～」とした。異学年でチームを組むため、縦のつながりも深まっている。仲間としてのつながりと、協力してやり遂げることで、互いの人権の共存を体感している。集団の中での役割を認識し、自己有用感も刺激されている。また、先輩が役割を果たす姿から、1年後に必要なスキルに気づき、今後のキャリア体験の内的動機付けを高めている。



【白熱の「タイヤ奪い」に臨む生徒】



【「台風の目」でタイミングよく跳ぶ生徒】

### (3) あすなる祭

9月に開催している学校祭であったが、令和3年度より体育祭が分離され、文化祭単独行事となった。従来、合唱コンクールが開催されていたが、令和2年度に廃止し、生徒の考えた企画を実施している。ダンス発表会、井川中王クイズ大会、ビンゴ大会とマンネリ化を避けた催しとなっている。文化祭の企画・運営は生徒会本部役員が中心となるが、かざり・おたすけ隊、もりあげ隊、たべ隊、かたづけ隊が組織され、全生徒がいずれかの隊に所属し、運営を支えている。各隊の主な仕事は、以下の通りである。



【予選を勝ち抜き大会に挑む生徒】

- ① かざり・おたすけ隊 …… コロナ対策掲示、体育館舞台看板の作成と設置
- ② もりあげ隊 …… もりあげタイ会（生徒パフォーマンス）の企画・運営
- ③ たべ隊 …… バザーの食券販売・管理
- ④ かたづけ隊 …… 環境整備、分別用ゴミ箱の作成と設置

縦割り班であるため、体育祭と同様に先輩の姿を見て、自分たちが上級生になったときに必要なスキルを肌で感じ、キャリアアップを図っている。3年生になると、素晴らしい成長の跡を披露してくれる為、教職員も保護者も楽しみにしている。



【バザーを楽しむ生徒】

午後のバザーは、学年単位で計画・準備を行い、食べ物とその他のものを1種類ずつ2つのバザーを開催している。また、PTAも家庭部を中心に、生徒とPTA会員にうどんを提供している。

経済的な負担軽減と生徒の食の健康のため、令和2年度より無償（PTA会計より出金）としている。バザーでは、販売することや客への対応等の職業体験的なキャリアも経験できており、本校で身につけたい力である4つの力を培う場となっている。

### (4) 辻町探検

「社会の一員として自立した人間となるための基礎づくり」の一貫で、校区内辻地区の歴史や文化に触れるとともに、地域の先輩の思いを受け止め、伝統を引き継ぐ者として、地域社会の創り手となることを目指した教育活動である。令和3年度は、地域支援ボランティアと地元ボランティアガイド（8名）達と交流し、歴史・文化・建築物の説明や、辻町と生徒達への思いを伝えてもらっている。



【ボランティアガイドの説明を聞く生徒】

2つのコースで辻町を歩き、各所で待っている地元ボランティアガイドの皆さんと会うこととなっている。令和4年度のコースを紹介する。

#### A：石光山穴薬師コース

- 支所 — いろり山下家 — 仁尾住宅 — 石垣 — 秋山家倉庫 — 芳水酒造 —  
— 石光山穴薬師 — 四ツ辻・辻野町並み（勇楼・旧四銀） — 支所

## B：辻渡し場跡コース

支所 — 島尾家住宅 — いろり山下家 — 宝来橋 — 今宮神社 — 仁尾住宅 —  
— 四ツ辻・辻野町並み（勇楼・旧四銀） — 辻の浜・辻渡し場跡 — 支所

生徒達はタブレットを活用し、ボランティアの語りを動画で、建築物や史跡を写真で撮影するなどの記録を行う。教室ではプレゼンテーションを作成し、他コースの者と情報を共有する。

地域の史跡・文化と伝統とを自分たちに伝えようという熱い思いに触れるこの体験は、辻町の一員として地元へ根ざし、地域や社会の創り手になるという生き様も、多様な生き方の一つであり、豊かな人生になりうると感じられる貴重なキャリア体験となっている。このことが、自分たちもまた、地域社会の一員であるとの自覚につながっている。



【説明をタブレットで記録する生徒】

### (5) アクティビティー体験

ラフティングは三好市の自然を活かした産業であり、自然の素晴らしさを感じることができるアクティビティーである。宿泊訓練の代替え行事として始まったが、ジオ学習もできる体験活動であり、生徒達は楽しみにしている。また、ジビエ料理の昼食も味わうなど、郷土色満点の思い出深いものとなっている。



【ラフティングに出発する生徒】

【急流で楽しむ生徒】

校区内にある腕山スキー場は、県内唯一のスキー場である。「スキー体験」は井川中学校の伝統行事であり、保護者の中にも体験した方がいる。生徒達も地元の自然を誇りに思っており、「腕山スキー場で滑るのは楽しいので、ぜひ訪れてほしい」と来日前のALTにメールで紹介していたほどである。



【指導を受ける生徒】



【自由に滑る生徒】

どちらの体験も地域の自然に親しみ、ふるさとの良さを味わえるため生徒が将来、地域を離れたときに、周りの人にふるさとの良さを伝えることができる魅力的な教育活動となっている。

### (6) 人権啓発活動

生徒間の交流を深めるとともに、保護者への啓発の機会を増やすために、令和2年度より、人権意見発表会と人権講演会を切り離し進めている。人権意見発表・意見交換会では、各学年の代表が、全校生徒と保護者に人権作文を発表し、その内容について感じたことや考えたことなどを、人権委員会の生徒を進行役に進めていく教育活動となっている。異学年の意見を聞く機会となっており、幅の広い意見を知ることや、運営する先輩達の姿を見習うことができるため、自身の話し合い活動でのスキルアップの契機としている。

また令和3年度からは、生徒と同じテーマで保護者間で話し合い、考えや意見を生徒に語る

場面ももうけた。活動の後で保護者から「生徒が場を仕切って堂々としている」、「人権をテーマに話す機会は少ないが、意見が聞けたり交流できたことで、子どもの成長を感じることができた」と好評価をいただいた。

もう一方の「人権講演会」は、差別の現実から学ぶことを重視し、講師の体験したことや大切にしている生き方を語っていただくことで、人権意識を高めることを目的としている。生徒が関心のある人権問題についての講演を依頼し2学期に実施している。令和2～4年度は、それぞれ「私が歩んだ道」中原サヲ江さん、「ありのままの自分で生きる～性的マイノリティーの人権～」徳山富子さん、「あることをないことにしない」大湾昇さんに講演をしていただいている。いずれも7月の人権意見発表会でとりあげたテーマと共通するので、生徒達も真剣な眼差しで聞き込んでいる。

その成果として、体育館シューズの色が男子は青、女子は赤と決められていたものが、生徒会での話し合いにより「どちらを選択してもよい」となった。また(1)でも触れたが、名札についても「学校に登校している間だけの着用」となった。いずれも、令和4年度から実施している。

さらに、生徒への人権啓発と豊かな心情を育むことを目的に、人権映画鑑賞会を4月に開催している。令和2年度は、休校により実施できなかったが、以降は「聲の形」「あの日のオルガン」「彼らが本気で編むときは」と定期に開催している。事前の紹介と、事後の感想や意見の交換で、自分自身を見つめ直すとともに、多様な意見や考えを受け入れる機会となっている。

#### (7) P T A活動の改革

社会が子育て世代や学校教育に求めていることも多く、教職員も保護者も忙しい毎日を過ごしている。その上に、少子化による学校規模の縮小に伴い、教職員数やP T A会員数が減少している。そんな状況にもかかわらず、従来のみでP T A活動は組織・運営されているために、教職員も保護者も負担が大きくなっていると感じる者が多くなってきた。そこで「教職員の働き方改革」と「P T A活動の負担の軽減」をはかり、ワークライフバランスについて真剣に考えていただいた。令和2年度のP T A役員会で構想を伝え、了承をいただき、令和3年度から本格的に実施した。まずは、P T A副会長が各地区2名で、3地区あるものを、辻・井内地区を統合して2地区にし、人数を減らした。次に改革したことは、「P T Aの各部の会を行事の日の昼間(日曜日)に実施する」ことである。日曜日なので勤務の振替を行うために、教職員は勤務時間内の



【意見交換会で異学年交流する生徒】



【意見交換する保護者】



【あすなる祭でのP T Aバザー】



【奉仕作業での剪定】

会となり、振替休日が担保できる。一方、保護者は、学校に集まる機会が減り、夜に子どもをおいて出てくることもなくなり、負担の軽減と、子どもと一緒にいる時間が増えるというメリットがあった。

負担軽減の取組の具体例は、次の通りである。

- 4月平日 …………… 家庭訪問の希望制（校内面談も可、無しもOK）
  - 7月第1日曜 …………… 人権意見発表会・意見交換会とPTA広報部会
  - 8月最終日曜日 ……… PTA奉仕作業（生徒登校日）とPTA家庭部会
  - 9月第2日曜日 ……… あすなる祭と第2回学校運営委員会（含保護者）
  - 11月最終日曜日 …… 参観日とPTA本部役員会
- ※ 学校運営委員会も、行事に合わせて実施している。

家庭訪問を希望制にしたので、4日間から2日間に減少した分、教育課程にゆとりが出た。これ以外にも、年間3回発行していたPTA新聞「あすなるだより」を年3回から2回に削減した。さらに、ホームページや学年便りとかぶっている内容はカットするなど内容を精選することで、ページ数も削減した、それに伴って広報部の集まりも1回減った。教職員も保護者も負担感は減少したと好評である。

#### (8) 福祉体験

社会福祉協議会による車イス・高齢者疑似体験、手話ボランティアによる手話コース「ふるさと」体験、みよし地域包括支援センターによる認知症サポーター養成講座のそれぞれを少人数のグループ順でローテーションし、すべて体験する教育活動である。高齢化社会で必要不可欠な仕事を体験したり、聞くことにより、他者との違いを認め、社会的弱者に寄り添える心の育成をねらいとしている。

特に車イス体験では、介助者の立場を体験することで、介護をするには、相手の思いを知り、行動することの大切さを理解できることを期待している。また、本校が長年継続しているプルタブ集めによる車イスの贈呈の意義を感じる良い機会となっている。令和4年度に10台目の車イスを三好市社会福祉協議会へ寄贈した。このプルタブ収集には、県外からの協力も増えている。



【手話コース「ふるさと」の練習】



【車イス体験】

#### (9) マナー講習，職場体験学習（職場訪問）

例年、3年生の7月に職場体験学習を実施している。事前学習には、阿波銀行より講師を派遣していただき、「マナー講習」を実施している。「相手がどう感じるか」を意識して、電話の応対やあいさつ等のロールプレイを行い、ビジネスマナーの向上を目指している。この経験をその後の事業所での現地実習に役立てている。残念ながら、令和2・3年度はコロナ禍のために、職場体験学習を職場訪問に変更し、各事業所でのインタビューを基に、学んだこと感じたこと、各事業所の方の思いをまとめ、全員でプレゼンテーションすることで共有した。

令和4年度からは、職場体験学習を1日にして3年ぶりに実施した。実際に働く体験を通して、働くことの意義や、地元で働いている方々の生き方や思いを感じ取り、地域の一員として、地元で生きていくことも、人生の可能性の一つと捉えられたようであった。コロナ禍にあつて、井川町内に限らず近隣の多くの事業所が生徒達の希望ということで、職場訪問や職場体験を快く受け入れてくださったことに深く感謝している。



【マナー講習】



【訪問依頼の連絡】



【職場訪問】



【職場体験後の発表（共有）】

#### (10) 林業体験

西井川林業クラブの方々と西部県民局林業振興担当者を講師に、「自然と共に生きる」をテーマに林業についての講話と伐採体験を実施している。西井川小学校では伐採は経験済みだが、辻小学校では未経験である。実施することにより、西井川小出身者は、リーダー（経験者）としてのキャリア体験ができることと、辻小出身者は、共通の体験をすることにより、仲間としての絆を強めるとともに、地域社会で生きる人々の思いや、自分たちに期待していることを知ることができている。



【林業体験事前講話】



【林業体験】



【ダンス練習（敬寿荘訪問）】

#### (11) 「敬寿荘」との交流

地域の養護老人ホーム「敬寿荘」との交流が続いているが、コロナ禍で訪問による交流ができなくなってしまった。そこで、福祉体験で覚えた手話コーラス「ふるさと」とメッセージや、メッセージとダンスをビデオレターとして作成し、横にメッセージを書いて花を植えたプランターと共に贈呈した。後日返信のビデオレターが届き、お互いの思いを交換した。今年度は、訪問による交流が復活し、様々なゲームを通して交流を深めることができた。



【代表による敬寿荘訪問】

## 7 評価と考察

「変化する時代にあった持続可能な学校運営」とするために、2つの改革を進めてきたところ、評価として、4点の成果が感じられた。

- (1) 経験の浅い教職員が、経験のない校務分掌を担当したり、アイデアを出し、創意工夫しながら教育活動を進めることができた。
- (2) 要所で、ベテランの教員がサポートして、リスクマネジメントをしていくという協働の姿がよく見られた。
- (3) 人権教育の授業では、ベテラン教員の持つノウハウや、資料とその分析などの記録を、若い教職員に提供し、研修を深めた。
- (4) 生徒・保護者・教職員から、活動の改善点やあたらしい企画案など、ポジティブな意見が多く聞こえるようになった。

成果が感じられた理由・考察としては、「学校にも家庭にもゆとりが生じ、生徒と関わる時間ができた点」と、「どのような力をつけさせるかを周知し、理解されたことで、教育活動の目的が保護者と共有できた点」が挙げられる。また、アンケート結果を受けた学校運営協議会等での意見を紹介する。(枠内)

- ① P T A活動のスリム化も進み、役員会や部会を参観時や行事の時に昼間開催してくれるのはありがたい。夜に子どもを残して出るのは不安であった。回数も減り、負担感は減少した。体育祭もコロナが終わっても今のままが良いと思う。(保護者)
- ② 通学カバンの見直しや、防寒着の柔軟な取り扱いなど、改革をしていただいて感謝しています。保護者も、不便だなと感じていても、無理だろうとあきらめていた部分もあるので、これからも改革する姿勢は重要だと感じました。子ども達も生徒会で意見を出し合って改善案を出し、その改善が実際に反映される。生徒の自主性や責任感の醸成にも活かされていると思います。(保護者)
- ③ 学校生活2-1「毎日楽しく登校しているか?」、学校生活2-2「友達と仲良くしている」の問いに「できている」「ほとんどできている」の回答ばかりで、今問題になっているいじめなどないように感じました。(学校運営協議会委員)
- ④ P T A活動や学校行事はコロナの影響もあり、活動に支障が出ることはやむを得ないし工夫して色々できていたと思う。働く女性も増える中でP T A活動が多いのも、負担が大きくなるようにも感じる。適切かどうかを投げかけることも必要だと感じた。  
(学校運営協議会委員)
- ⑤ 学校教育についての保護者アンケート10-1で「学校は、保護者や地域の意見を大切にし、教育活動に反映させている」の回答が「できている」「ほとんどできている」ばかりで、井川中学校での生徒の健全な成長ぶりの結果だと思います。学校生活も家庭生活もそれなりに充実しているということでしょう。誇れる井川中学生たちであることを、地域の人間としてうれしく思います。(学校運営協議会委員)

保護者や学校運営協議会委員からは、過大な評価をいただき、ありがたいことである。だが、課題もまだまだ多い。不登校生徒や特別な支援が必要な生徒への対応など解決できていない課題もある。

## 8 おわりに

改革の結果、教職員間には、ポジティブに「まずはやってみる」という雰囲気ができ、学校運営の一端を自分が担っているという自覚ができ、充実感ややりがいも感じているようである。昔からよく言われた「教育活動は、余力を残すように計画するように。」は、ワークライフバランスの大切が求められる時代の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方の一つの解答となっているのかもしれない。今回の改革を含めた様々な取組に対して、協力していただいた保護者や地域の皆様、ご指導・ご協力いただいた三好市教育委員会の皆様に心からの感謝を申し上げ、今回の報告とする。

### 研究同人（令和2・3・4・5年度）

田所 啓	井上 清隆	武井 和夫	大谷 一幸	川原 敏子
山口 雄三	伊丹 尚子	内田ゆかり	爲實 千代	北原 伸治
仁尾 芳人	伊藤 真里	山本 梓	田口 智也	伊原 隆晃
森岡 和士	矢川由衣加	中島あかり	山下 奈弥	木村 睦美
畠中 達也	岡田 有玄	香川 充	伏平亜紀子	赤松 奈美
山内 幸子	赤堀 近実	石井 一次	高田 優	尾脇 正明
中村 愛莉	小角美由紀	Zachary Goff	Caitlyn Amanda	



外国語学習から『学級づくり』  
～外国語の特性であるコミュニケーションを生かして～

三好教育研究所 研究員 リーデル 章代

1. はじめに

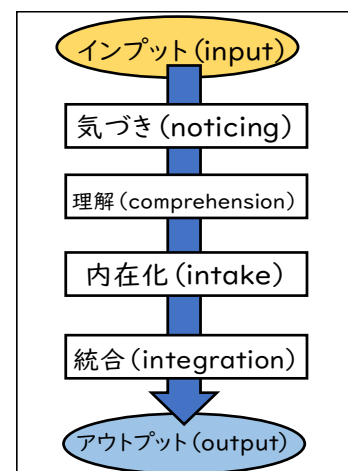
小学校外国語教育は 1990 年代に本格的に導入されてから現在まで、幾度かの改定があり平成 29 年告示の学習指導要領により英語教育教科化となった。小学校中学年から「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることが求められている。高校卒業時に求められる「6割以上の生徒が、CEFR A2 レベル（英検準2級程度）、3割以上の生徒が B1（英検2級程度）レベル相当に達する」ことを考えると、小学校段階においていかに英語に「慣れ親しむ」ことが重要であるか分かる。

外国語科は、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の4技能で構成されている技能教科である。技能向上のためには、水泳やリコーダーのように十分な練習が必要であるが、その練習時間が授業のみで十分にとれていないと感じた。そこで、昨年度は言語材料の定着を図るため、短時間ながらも毎日英語に触れる機会の頻度を増やすことでの児童の変容を研究した。結果、児童の英語に対する意識やテストでの正答率、また会話を続ける力にも改善の結果が得られた。しかし、短時間といえども毎日続けることへの担任の負担感が課題として残った。今年度は、担任の負担感が少なく、且つ子どもも教員も継続して続けたいと思える持続可能な活動を研究したいと考えた。

2. 1年目の取組（※研究紀要第63集記載）

Foreign Service Institute(FSI, 外交官養成局)が公表しているリストに基づく、一般的に日本人が英語を習得するためには 2200 時間が必要だと言われている。このリストは、世界の言語を4つのカテゴリーに分類し英語ネイティブのアメリカ人外交官が外国語を使って仕事ができるレベルに達するまでに必要な時間を公表しているものである。そこでは、日本語は英語からは最も遠い言語に分類されているため 2200 時間もの時間を要するというのである。日本の小学校では外国語活動から含めて 220 時間、中学校 420 時間、高校 595 時間、合計でも 1235 時間で 2200 時間にはほど遠い。

そこで昨年度は、授業時間を増やすことは難しいので、英語を使う頻度を増やすこと、つまりインプット・アウトプットの回数を増やすことで言語材料の定着を図ることを目指し、研究を進めた。具体的には、小学校5・6年生を対象に毎朝、特別な行事が予定されていない日に3～5分程度の時間で英語に触れる時間を「English time」として設定した。活動内容は、チャンツや児童同士のペアによるスモールトークである。つまり第二言語習得のプロセスである内在化・統合にいたる前段階である練習を主として行った。



昨年度6月と同年11月の授業中の児童の様子を比べると、11月の授業ではデモンストレーションを促したときに挙手できる児童が増えたことや、ペアやグループでの会話に積極的に臨むようになったことから、やはり少ない時間でも語学に触れる頻度を多くすることでの効果を感じた。また、まだ読み・書きが十分でない小学生段階での筆記テストは、英語力を判断するには適切でないかもしれないが、単元テストの平均値が5年生4.7ポイント、6年生14.5ポイントの上昇が見られたことは、子どもたちが英語を使うことで慣れ親しむ機会が増えた効果だと考える。

しかし、頻度を増やすことでの児童の英語力向上が見られたものの、業務に忙殺されている担任が、授業以外の時間を毎日英語のために設定するのは難しいということが昨年度の課題であった。

### 3. 2年目の研究内容

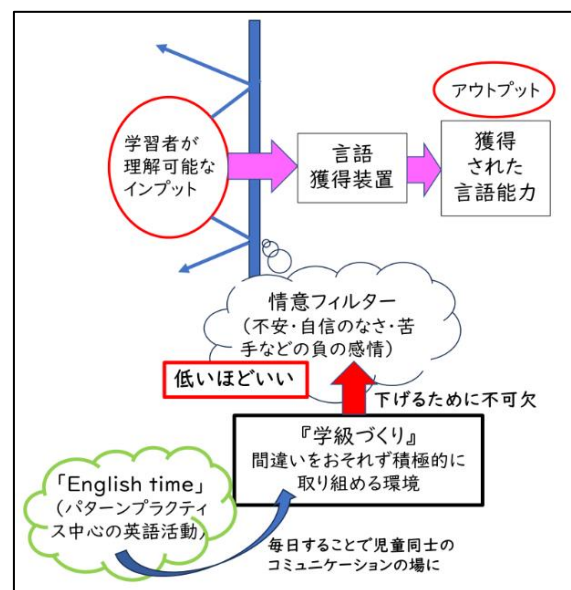
担任の負担感を減らすためには、英語力の向上のみでなく、他の付加価値があれば担任も意欲的に取り組めるのではないかと考えた。

外国語学習は、コミュニケーション力を培う場である。相手の話を興味深く聞き、質問をして相手をよりよく知ろうとする教科である。そこで外国語学習が『学級づくり』の一役を担うことができると実感できれば、担任も意欲的に取り組めるのではないかと考えた。

第二言語習得のためには、情意フィルターを下げるのが不可欠である（クラッシュンの情意フィルター仮説）。情意フィルターとは、「不安」「自信のなさ」「動機付けの弱さ」といったネガティブな感情で、これらが強ければ強いほど第二言語の習得を妨げてしまうという仮説である。ここで大切になるのは、児童が間違いをおそれず積極的に取り組める『学級づくり』である。『学級づくり』は、すべての学校教育の土台となるものである。その『学級づくり』を、パターンプラクティスに絞った英語活動からアプローチできないかと考えたのである。

研究開始前の5月に行ったアンケートでは、英語が難しいと思う理由のほとんどは、「発音が難しい」という意見だった。これは、児童自身が英語を十分に練習できていないと感じていたり、また話せていても自分の英語に自信がないと感じていたりすることの現れであると考えられる。このことから自分の話したことが聞き返されたり、伝わらなかったりすることを必要以上に恐れていると感じた。聞き返されることは悪いことでないし、会話においては発音のみで意味を推測するのではなく、会話の文脈から判断されることが多い。一生懸命単語のみの発音を練習したところで、外国語の目標には届かない。語学活用能力は、使うことで推測する力や相手に伝える力がついてくるのである。

英語で会話する機会を増やすことで、英語を使うことにも慣れ、自信をつけ、会話の中で他の相違を発見し、また違いを楽しむ経験を積むことで、一人ひとりが自分らしくいられるような『学級づくり』を目指したいと考えた。



【情意フィルター仮説と『学級づくり』】

#### 4. 研究の実際

##### (1) 担任との連携

本年度も、5年生・6年生の学級に協力を依頼した。異動もあり、協力校の担任が変わっているため、昨年度の研究の結果そして今年度の取組について説明を行った。

まず、昨年度の研究内容・成果をまとめたもの(※1)を見せながら、英語に触れる機会の頻度を増やすことの効果を話した。そして、今年度の研究内容概要(※2)を提示しながら担任に説明した。

##### (2) 実践内容

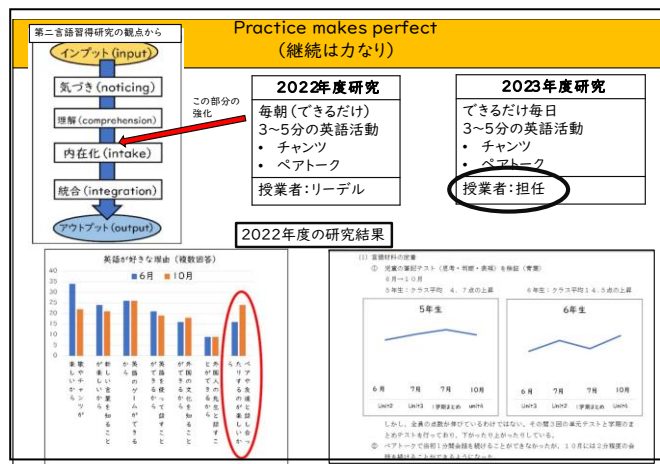
本研究は小学校2校(5年生34名、6年生32名・20名)の協力を得て実践した。昨年度同様毎朝、特別な行事が予定されていない日に3～5分程度の時間で英語に触れる時間「English time」を設定するものである。

昨年度は、朝の短い時間に効果的な活動を模索しながらだったため、私が指導した。しかし、今年度は実際に担任に指導してもらうことにした。

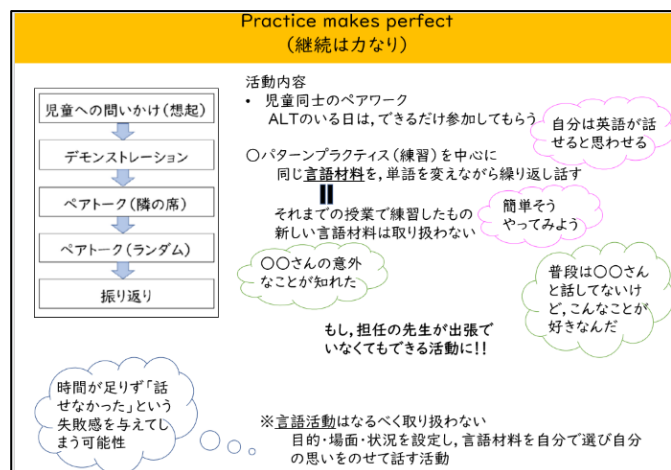
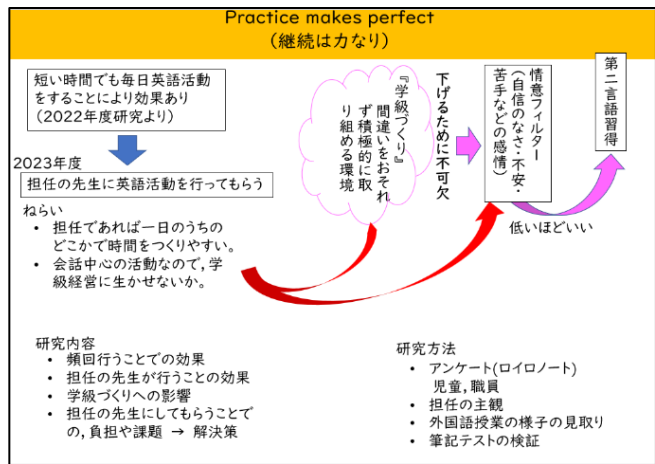
指導者を担任にするねらいは、2点ある。1つ目は、今年度のねらいが『学級づくり』であるからだ。『学級づくり』を意図的に行うのは担任である。やりとりが多いほど「聞くこと」「話すこと」の機会が増える。自分のことを知ってもらったり、相手のことを知ったりする機会が増えることにつながる。クラスメイトのことを知る機会が増えることで、新たな発見につながり、それが『学級づくり』に生かせると考えた。

2つ目は、担任であれば1日のうちのどこかで時間をつくりやすい、ということだ。例えば、朝の活動時に集会が入ってしまっても授業中や帰りの会の時間などに組み入れやすいと考えた。さらに、英語が得意ではない担任でも、続けられるような活動になるようにしたいと考えた。

(※1) 昨年度の研究内容・成果をまとめたもの



(※2) 本年度の研究内容概要



(3) 実践方法

昨年度の研究を生かし、毎回なるべく同じ型で会話中心の活動を実践してもらおうこととした。(※3)

まず、「こんな時はどう言うのかな」と簡単な場面設定を児童に与え、なるべく児童から言語材料を引き出し、その後担任とALT、または担任と児童とで短くデモンストレーションを行った後、ペアトークへという流れである。

言語材料や児童の実態によって、想起やデモンストレーションを省くことが可能であるが、あくまで全員に「話せる」と思わせる状況を大事にしたかったので、「言語活動」ではなく「練習」に焦点を絞った(注1)。水泳で例えると、バタ足だけや、ストロークだけの練習といったところである。

その後、時間のない日は別として、できる限り振り返りをしてもらうようにした。その日の「English time」のめあて・振り返りの内容は、児童の実態に合わせて変えたり組み合わせたりしてもらった。活動後の短い時間でも振り返りを行うことで、児童自身が「話せた」と実感できる手立てとなっていた。

(※3) 英語活動の実践方法

**Practice makes perfect**  
(継続は力なり)

短時間(3~5分)で!! 時間よりも回数で定着!!

『泳げるようになりたいと思ったら、手の動かし方とか、足の使い方とか魚の動き方がかなり難しいけど、泳げるようにはなりません。英語の学習も同じです。実際に聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする経験が必要ですよ。』(2012白井恭弘)

**活動のGoal**  
完璧な文法で話せよ 英語を練習する機会を与える

- ① 児童への問いかけ(想起)
- ② デモンストレーション
- ③ ペアトーク(隣の席)
- ④ ペアトーク(ランダム)
- ⑤ 振り返り

活動内容  
○パターンプラクティス(練習)を中心に...  
同じ言語材料を、単語を変えながら繰り返し話すこと

① ~を友達に聞いてみよう! 何て言ったらいいんだっけ?  
ex) 一番好きな動物は何か。友達に聞いてみよう!  
どうやって聞く? 「何」を聞きたいから...? -what!  
what animal do you like?  
いいね!でも、一番好きな動物を聞きたいの... -favorite?  
:  
What is your favorite animal?  
※ 想起を促すけども、思い出せないことにはあまり時間をかけずさくっと言い方を教えてあげる  
児童から教師へ質問 等 簡単そうやってみよう

② ALTと一緒にデモンストレーション  
③ 「質問・答え」のみのやりとりプラスα  
➢ リアクション(Nice/Cool/Wonderful/Really?)など付け加えることも  
➢ 会話を掘り下げる  
ex) Why? / Do you like-? / Me too.

⑤ 英語に関する振り返り  
・ (自信を持って)伝えられた人?  
・ 何人と話できた?  
内容に関する振り返り  
・ 友達の意外なところ見つかった?  
※ なるべく全員が挙手(アクション)ができる質問で振り返る  
その中でも、がんばって活動できた子どもにフィードバックできるように

自分は英語が話せると思わせる

(※注1)

言語活動	練習
「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」活動	言語材料について理解したり練習したりすること



【活動後の振り返り】

めあて	振り返りの問いかけ例
① より多くの人と会話すること	Please raise your hand, talk to more than ○people. 3人以上と話できた人? 4人以上?
② 相手に興味を持って質問をつけかわえること	Please raise your hand if you ask plus 1 question. プラス1の質問付け加えられた人?
③ 相手の話に反応すること	Please raise your hand if you make reaction to your partner. 話に反応して、リアクションできた人?
④ より長く会話を続けること	Please raise your hand if you kept talking more than □ minute. 1分以上話続けられた人?

<言語材料>

実際に担任の先生にお渡した言語材料の具体例

この中の既習の言語材料を「English time」で実践してもらった。

5年生			
Unit1	What's your name? - S-A-T-O-S-H-I		
	What sport / color/ fruit do you like?		
	How do you spell your name?		
Unit2	What do you want for Christmas?		
	When is your birthday? -I want a yellow T-shirt.		
Unit3	Do you like rainy days? Why?		
	What subject do you like?		
	What do you have on Mondays?		
	What do you want to study? - I want to study home economics.		
	What do you want to be? - I want to be a baker.		
Unit4	Can you cook well?		
	Can you play -?		
	Can she / he sing well?		
	Who is this? - This is Mark Smith.		
	Who is Mark Smith? - He is my father. He is a baker. He can bake bread well.		
Unit5	Is this the symbol for a school?		
	Where is my pencil?		
	What do you want for your town?		
	Where is the post office?		

Unit6	What food do you like?		
	How much is it?		
	What would you like? - I'd like a hamburger.		
	How many apples do you want?		
Unit7	What do you do on New Year's Day?		
	What season do you like?		
	What do you enjoy in winter?		
	Why do you like winter? - We have New Year's Day in winter.		
Unit8	What housework do you usually do?		
	Who is your hero? - My hero is my brother.		
	Why is he your hero? - He is good at cooking. He is always kind to me.		
	What can he do well?		

6年生			
Unit1	What language do you want to study?		
	What is your favorite animal?		
	When is your birthday?		
	I'm Emily. I'm from Singapore. I like dogs. My birthday is May 5 <sup>th</sup> .		
	Do you have brothers or sisters?		
Unit2	How do you come to school?		
	What time do you usually go to bed? - I usually go to bed at 10pm.		
	What do you usually do on Sundays? - I usually watch soccer games on Sundays.		
	What is your treasure?		
Unit3	What is this country?		
	Where do you want to go?		
	Why do you like Italy? - You can eat pizza.		
	What do you want to eat?		
	Do you like traveling?		
Unit4	Where did you go this summer?		
	Did you enjoy your summer vacation?		
	What did you eat?		
	What did you do last Sunday?		

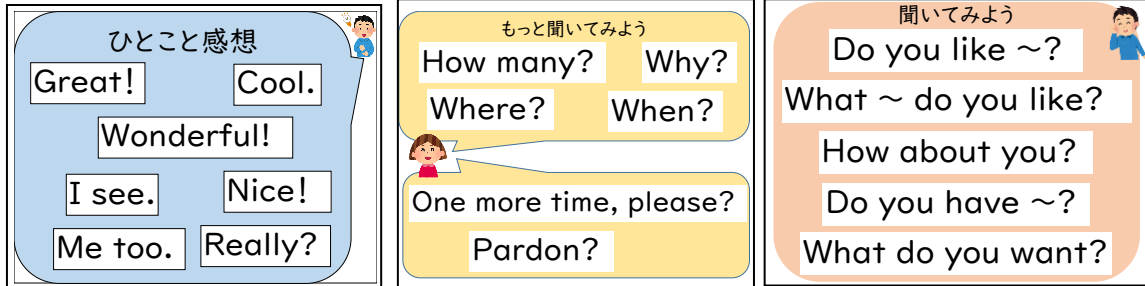
Unit5	What animal can you see in the sea?		
	What can penguins do well?		
	Where do lions live? - Lions live in the savanna.		
	What do lions eat? - Lions eat zebras.		
Unit6	What do you usually have for breakfast?		
	What did you eat last night?		
Unit7	Did you enjoy sports day?		
	What did you enjoy? - I enjoyed talking with my friends.		
	What did you see on your school trip?		
	What is your best memory?		
Unit8	What club do you want to join?		
	What subject do you want to study in junior high school?		
	What school event do you want to enjoy?		
	What do you want to be?		

<実践に使用した掲示>

会話中に必要なものや便利な英文を掲示したものである (R3 板東小発表を参考に作成)。研究実践を始める前に3学級ともに渡しておき、学級の形態に合わせて使ってもらった。常時、教室掲示してある学級もあれば、外国語の活動時のみ黒板に貼り付けるようにしている学級もあった。



【常時掲示の学級】



<パターンプラクティスに使用したカード例>

カード使用の目的：自分のことを知ってもらうことよりも、誰とでも会話をさせたいとき。なるべくたくさんの友達と短い時間に会話すること。

- 方 法：①全員にカードを配布  
 ②聞かれたことに対してカードの情報を答える  
 ③次のパートナーを探す(言語材料に慣れてきたら、カードを交換してから)

●5年生

Unit2: When is your birthday?  
 What do you want?

配られたカードのキャラクターになりきって誕生日・欲しいものに関して会話する。自分の誕生日以外の日付や欲しいものの語彙が増えたという効果が見られた。



Unit6: What would you like?  
 How much is it?

レストランの店員と客になったの会話練習であるが、レストランにおいてある料理は1つだけという設定にした。

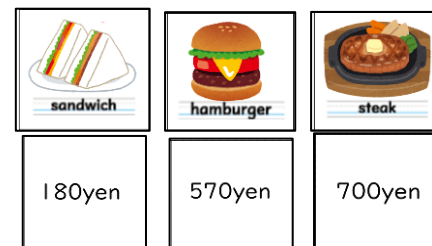
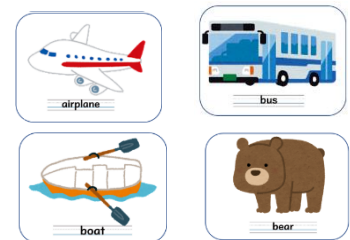


表  
裏

●6年生

Unit2: How do you come to school?

通学手段はほとんどの児童が徒歩もしくは保護者に送ってもらっているので変化をつけるために、あり得ない通学手段にすることで児童の興味を引くようにした。



※ 5年生「Unit4: This is ~.He/She can ~.」「Unit5:Where is ~?」、6年生「Unit4: Where do you live?」のパターンプラクティスに使用したカードは、令和4年度研究紀要63集にて記載済みであるので省略

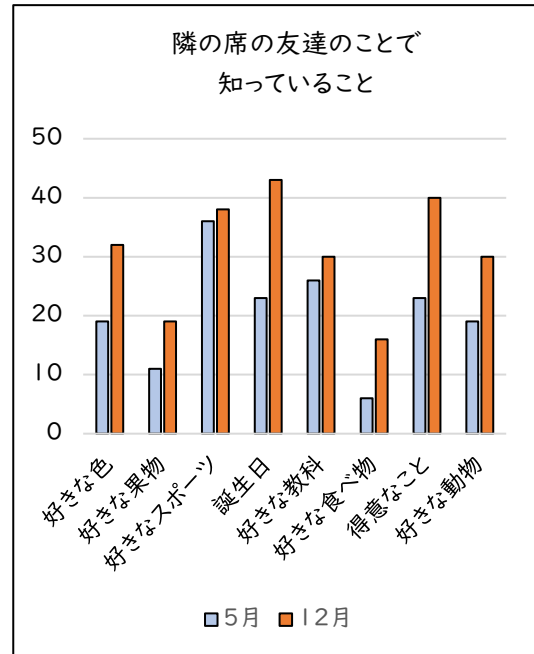
## 5. 結果

(1) 5月・11月に実施したアンケート結果（ロイロノート）から

※以下グラフは3学級の合算（対象児童81名）

### ① 『学級づくり』への効果

『学級づくり』について数値化し、比較・検証することは難しいので、5月と11月のアンケート時、隣にいる友人のことをどれだけ知っているのかを問う質問をした。例えば「好きな色」「好きな果物」「好きなスポーツ」「誕生日」等である。もちろんどの学級も、5月と11月では、席替えをしているので、無作為なクラスメイトについてということとなる。すると、3学級のうちのどの学級でも、11月は5月に比べて隣の席の友人に対して知っていることが全ての項目について増えた結果となった。もちろんその間、英語活動のみで得た情報ではないこともあるだろうが、お互いのことをよりよく知っていききっかけになったと考えられる。



(アンケートの自由記述より)

- 相手のことについていろいろ知れたので、前よりも仲良くできた。
- 友達の知らないことが知れた。
- 英語で話すことができてきた。友達と英語を言い合うのが楽しい。
- 「English time」はとても楽しくて、みんなと話し合えるからとてもいい。
- 「English time」の時間をとったらすぐ英語が分かって嬉しいし、友達のこともいっぱい知れて嬉しい。
- クラスの子の誕生日や好きな食べ物をもっと知りたい。

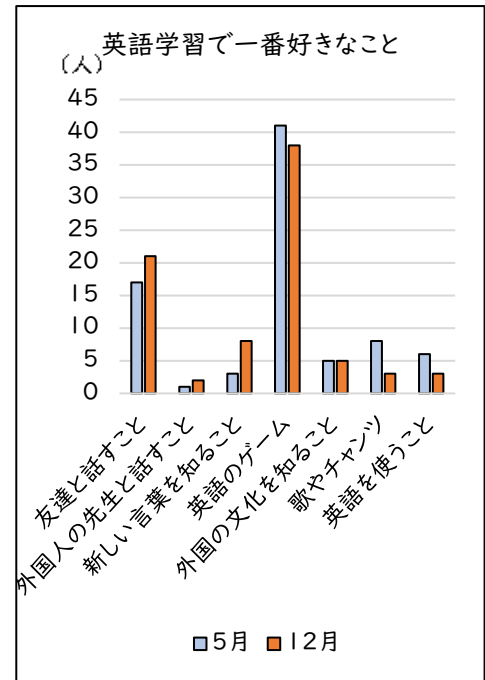
### ② 英語学習への意識

英語学習への意識にも、顕著ではないが多少の変化が見られた。「英語の学習は好きですか」という問いに対して、「とても好き」が4人増え、「どちらかといえば嫌い」が2人減った。また「英語は得意ですか」という問いに対しては「とても苦手」が3人減り、「とても得意」・「まあまあ得意」を合わせた意見が2人増えた。

また「英語学習で一番好きなことは何ですか」という問いに対して、「友達と話すこと」「外国の先生と話すこと」といった答えが合わせて5人増えた。5月では、「英語のゲーム」や「歌やチャンツ」が一番好きと挙げていた児童が多かったが、代わりにコミュニケーションの本質である「話すこと」の良さを実感できた結果であると考えられる。他にも「新しい言葉を知ること」が5人増え英語学習への意欲が増したのではないかと考えられる。

(アンケートの自由記述より)

- 「English time」をすることで、英語で話すことに自信が持てた。
- 百の位が英語で言えるようになったから、次は千の位が言えるようになりたい。
- 朝の時間に少し覚えるだけでも自分の力になっていると思うのでずっと続けてほしい。
- 朝に英語を話す活動があることで、英語をとっても身近に感じられるようになりました。将来なにか外国に行ったときなど、使える機会が増えると思うので、将来のために英語に慣れたいです。
- 英語が楽しくなってきた自分に気がつきました。
- もっとたくさんの文法や単語を知りたい。
- 友達の家族のことについて英語で話したい。

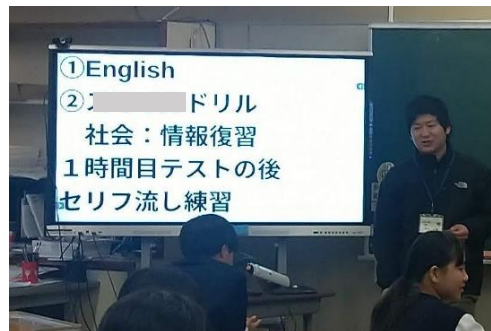


## (2) 担任へのインタビューから

12月、担任の先生方に児童のアンケート結果を提示しながら、半年間「English time」をしてきた感想を聞いた。

### ① 「English time」の時間の設定について

担任の先生に対して当初から一番懸念していた時間の設定についてであるが、意外にも3人もあまり負担にならなかったという意見であった。開始当初は戸惑うこともあったが、毎日するもの、と慣れてからはルーティーンとして行っていたようだ。また、全校集会や朝のマラソン等行事があるときには無理に行わず、できるときにする、というスタンスで気軽に取り組んでいたこともプレッシャーにならずよかったという意見が聞けた。



【朝の活動に組み込んでいる様子】

### ② 児童の様子について

今年度の研究のねらいは、英語活動を『学級づくり』に生かすことである。児童に対するアンケートでは残念ながら顕著といえる結果は得られなかったものの、担任からみた「English time」を毎日行ったことでの児童の変容を聞いた。

もちろん「English time」以外に、日々の教育活動において担任は常に『学級づくり』を行っているので、「English time」のみの結果ではない。

まず3学級ともただ座って待っている子が少なくなり、やらされている感じではなく自主的に動けるようになってきた、との意見が出た。活動は、隣の席の児童とのペアワークの後、それぞれが立ち上がり自由に相手を見つけて会話するものである。開始当初は、自由に相手を見つける時に、誰かが来てくれるまで席で待つという児童が数名いた。しか



し回数を重ねるごとに、自主的に相手を見つけようとする態度が見られた。これは活動に児童自身が慣れてきたことや、同じパターンで繰り返される練習で、失敗のない活動だと認識し自信がついてきたことなどが考えられる。中には、児童の活動前の想起やデモンストレーションのときに、既に早く話したくてうずうずしている児童もいたようだ。また、担任の先生の観察によると、男女関係なく話せるようになった児童が増えてきたと感じているようであった。

### ③ 言語材料の定着について

「English time」を実施するようになって、担任3人とも、児童の英語力が向上したと感じるという意見だった。活動は、基本的に会話なので、児童にとって混乱しやすい5W1Hをほぼ毎日使うことになる。活動はパターンプラクティスであるが、言語材料を教師側からすぐに与えずに、毎回「誕生日何がほしい?って聞きたいんだけど、『何』ってどう聞く?」「誕生日いつって聞きたいんだけど、『いつ』ってどう聞いたらよかったっけ?」などのように児童に想起させてもらった。何度も繰り返すことで、児童自身から英語を産出する力がついてきたと感じられたようだ。実際に児童のアンケートにも「いろんな単語や文の作り方を知れたり、どこ、いつ、何、誰などが英語で言えるようになった」「英語が聞き取れたり、話せる英語が増えた。」(原文のまま)などといった感想があった。

また、英語に対する苦手意識の強い児童のための手立てとして、なるべく児童に想起させた言語材料を板書してもらった。その際、カタカナでの読み方は書かず、英語表記のみにした。活動中に、黒板やパワーポイントを見ながら会話している光景が見られた。すると、児童からも「黒板に英語で書かれているため、読み方を学ぶこともでき、それを声に出して読むので、書き方と読み方の両方を学ぶことができるのでわかりやすい。」という感想もあり、担任も英語を読める児童が増えてきていると感じていたようだ。



【想起させながら板書する様子】



【パワーポイントを使用しながらの想起】



【ALT もできる限り参加】

#### ④ 「English time」活動自体について

上記以外の「English time」を継続的に半年以上続けた感想

- 授業は英語専科担当の先生がしてくれているので、授業と朝の活動の掲示や言語材料の板書等が同じであれば、より効果的に英語活動ができるのではないかと思った。
- 短い時間でする活動なので、授業のウォーミングアップとしても使えそう。
- 忙しい朝に今日はどんな活動をさせようか、と考えなくてはいけないときにカードがとても便利で有効だった。また、自分のことではないので恥ずかしがらずにカードの情報を相手に伝えることができていた。

#### (3) 担任の先生方の工夫

また「English time」を行う中で、担任の先生が工夫してくれていた内容を紹介する。

##### ① ルーティーン化

朝の活動に毎朝するものとして組み込み、予定を視覚支援していた学級があった。(2)①参照)

朝の活動時にどのような内容を予定していても「English time」を最初にすることで、児童も朝の時間にすることが分かりやすく、英語をする時間が特別なものでなく、日常として受け入れられていた。



【朝の活動】

##### ② ターンの視覚化

ペアのうちの1人がボールを持ち会話をする。ボールを持っている方が会話のターンなので、会話の流れが把握しやすい。またペアを探すときにも、自分がボールを持っていなければ持っていない子を探そうとするので、普段話さないような友達とのペアを作るきっかけとなっていた。



【ボールを持って話す児童（右）】

##### ③ 設定の変化

ほぼ朝の活動の時間帯であったため、マンネリ化を感じるがあったので、変化をつけるために設定を変えて活動していた。例えば、設定の時間帯を昼や夜にすることで、非日常の気分を味わうことができ、あまり使う機会のない他の時間帯の挨拶を練習することができていた。

##### ④ フレンドリスト

学級のいろいろな友達と話させるために教師の仕掛けとして、フレンドリストを作成していた。児童それぞれが学級名簿を持ち、話すことができた友達の欄には日付を記入するというものである。実際に「English time」中に記入というのは時間の制約上難しく、これは授業中に活用されていたものだが、誰とでも話せるようにする工夫として紹介する。

## 6. 考察

2 学年 3 クラスの協力を得て研究を進めた。3 クラスとも単学級であり、児童はお互いによく知った仲だと予想していた。しかし研究を始めた当初は、隣の席の友達のことでも知らない情報がたくさんあった。研究を進めた 11 月には、知っていることがどの項目も増えた。アンケートによる「誰とでも活動ができていく」という質問に対しては、数字としてあまり変化は見られなかったものの、ランダムなペア活動が



【ランダムなペア活動】

友達のことをより深く知るという手段となったと思われる。母国語では敢えて話題にすることのない内容であっても、外国語の勉強だから話題にする内容がある。その中で友達の意外な一面を発見し、自分との相違点に気づくことができた。

また、カードを使ったパターンプラクティスで、相づちや共感など話を聞いているという意思を態度で示し、カードの情報も分かりやすく相手に伝え、そして出くわした友達の誰とでも会話をすると、というコミュニケーションスキルを練習する場にもなっていた。実際に研究当初は、「あいさつしてから、活動するんだよ。」「話してくれたら、反応するんだよ。」と毎回声をかけなければあいさつや反応もできていなかったが、1 か月ほどたった頃には特に教師側から指導をしなくても自然に、「Good morning, how are you?」から始まり、相手の会話に対しても、状況に合わせて「Nice.」や「Really?」「Me too.」といった反応ができるようになっていた。それと同時に、普段話をしないクラスメイトと「English time」中に会話することにも慣れてきて、言語のみでなく自然な反応を返せるようになっていた。コミュニケーションの 93% は非言語（態度・声の大きさ・質・話し方）だと言われている。幾度も会話の場を設けることで、言語のみならず非言語のコミュニケーションスキルも上達できたと実感した。

## 7. おわりに

2023 年の全国学力テストでは、4 年ぶりに中学 3 年生対象に英語も実施された。しかし「話す」の正答率はわずか 4.2%、さらに 5 問の設問のうち 1 問も解けない生徒が 6 割を超えたという厳しい結果となった。信州大学の酒井英樹教授は、子ども達が自分の考えを英語で伝える経験を積み重ねることが必要だと指摘している。私も、小学校 3 年生から始まる外国語活動の時点から、いかに英語を使うことに慣れ親しむかが重要だと考える。小学校段階の外国語活動・外国語でも、言語活動、つまり実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動を柱とした授業構成が求められている。外国語の目標はコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することであり、目標の中に、コミュニケーションを全面的に打ち出している。他の教科でコミュニケーションを円滑にする、ささいな技法を指導できる機会はあまりないと思う。相手の会話に対して相づちをうつ（反応する）、相手が言ったことを繰り返す（例: I like basketball. -Oh, you like basketball.）、さらに詳しく聞くために質問する（例: I like basketball. -oh, do you play basketball? Are you in the team?）など会話を円

滑にするスキルは、英語を学習していく上で必要不可欠である。これらのスキルを、英語学習を通して母語にも活かしてほしいと思う。

朝の会や帰りの会のときに、『学級づくり』の一環としてゲームやクイズまたはスピーチを行っている担任は多い。カードを使う英語活動は、英語のハードルも低くなり、またゲーム性が増すので、楽しみながら子ども達も取り組めると思う。「英語は言語であり、世界の人々とつながる重要なコミュニケーションの道具」(2012, 白井)であるので、世界の人々と言わず身近なクラスメイトともつながる道具として『学級づくり』に活かしていきたい。

言語材料の定着のためだけであれば、毎日パターンプラクティスを続けると効果は現れるかもしれない。しかし、研究を依頼した3人の担任は、『学級づくり』を意識し「昨日とは違う友達と話そう。」や「この話題をまだ話したことない友達見つけて話して。」など意図的な声かけや仕掛けを行ってくれていた。このことにより、より効果的な実践になったことも付け加えておく。

今後も「英語を話せる子ども」ではなく「英語を使ってコミュニケーションを図れる子ども」の育成のために、常に考え学び続けていきたい。

本研究紀要の作成にあたり、協力いただいた先生方・学校に感謝の意を表す。

#### 参考・引用

- 文部科学省, 「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」
- 文部科学省, 「高等学校学習指導要領・外国語編英語編」
- 文部科学省, 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 令和2年3月
- 岡田圭子他, 「基礎から学ぶ英語科教育法」, 松柏社, 2015
- 白井恭弘, 「英語教師のための第二言語習得論入門」, 大修館書店, 2012
- 村野井仁, 「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」 大修館書店, 2006
- Susan M. Gass・Larry Selinker,  
Second Language Acquisition: An Introductory Course
- アメリカ国務省 Foreign Service Institute(FSI)  
<https://www.state.gov/foreign-language-training/>

## 主体的に運動する子どもの育成 ～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～

三好教育研究所 研究員 松本 美穂

### 1 はじめに

戦後、高度経済成長期を経て、1990年代に入ると「人生80年」時代といわれるようになり、健康寿命が延びた。2000年に入ってから「人生100年」といわれるようになり、2023年9月「敬老の日」の日本経済新聞の発表では、100歳以上の人が過去最多の9万2139人になり、53年連続で増加傾向にあると記載されていた。

高齢化が進む現代社会において、健康維持や体力の向上をめざし、運動に取り組んでいる人は少なくない。例えば、日常生活の中でエレベーターやエスカレーターより階段を選んだり、通勤は自動車より自転車や徒歩を優先し、有酸素運動を取り入れたりするなど、運動することを意識している人も多い。また、仕事終わりや休日等、余暇活動に好きなスポーツをしたりジムに通ったりして、生活の中に運動を組み入れ習慣化するなど、積極的に体力や健康の保持増進に取り組んでいる人もいる。

背景には、自動車や電車などの交通手段が発達したこと、情報化の発展によりデスクワークの時間が多くなったことや、また家事においては、洗濯や掃除等をロボットがしてくれる等、家事労働の負担軽減と同時に、生活上での運動量も減っていること等が原因のひとつになっていると考えられる。

子どもたちの生活においても同様であると考えられる。都市化が進む中で、遊び場が減少し、特に山間部やへき地においては、少子高齢化が加速し、近所に一緒に遊ぶ友達がいないため、一人でゲームをしたり、動画を見たりする等で過ごし、外遊びや運動する機会が減少している。また、子どもたちの体力が低下傾向にあることを、「体力テスト」の結果からも推測できる。

### 2 研究の目的

変化が激しく、さらに不安定な社会情勢に加えて、地球温暖化や風水害等の異常気象、自然災害等は毎年多発しており、現代は予測不可能で先行き不透明な時代にある。

今後、特に備えが必要であると懸念されていることが「南海トラフ地震」である。この地震は、100年から150年周期で繰り返されており、前回の地震から約80年程経過しているため、警戒を余儀なくされている。阪神淡路大震災や東日本大震災以降、地震や津波だけでなく、災害全般に対して、避難訓練や避難備蓄等の関心が高まり「防災」や「減災」等の取組は、今や当たり前の行動として学校や地域、家庭で行われており、「避難訓練」や「避難備蓄」、「避難経路の確認」、「家具を固定する」等、災害時の備えはおおむねできていると考えられる。

しかし、避難する時に必要な体力は備わっているだろうか。例えば、走って逃げたり、高

台へ駆け上がったたり、あるいは、倒れてきた物を持ち上げて脱出したり他者を助けたりする等の筋力、脚力、持久力である。避難時には、特に下肢の力が必要であると考えられる。場合によっては、泳力も必要な時があるかもしれない。

『第8回日本トレーニング指導学会大会 災害発生時に必要となる防災体力と体力要素 口頭発表04（科学研究）1 四国学院大学 社会学部，2 香川大学 医学部』の記述には、『【目的】災害発生時，初動対応としての身体活動能力は，生存に重要な影響をおよぼす。いわゆる「防災体力」が必要である。「生存」のための避難行動において，どのような体力が必要であるかを明確にすることは，物理的な備えと同様に非常に重要な視点である。』とある。

日常生活において，運動する時間や習慣が少なくなっている現代人にとって，日頃から災害時のことをイメージし，適切な行動をとるための体力づくりを意識して「防災体力」を身につけておくことが，命を守ることに大きく繋がると考えた。「防災体力」を身につけることで，「いざ！」という時に，自分の命を守り，家族や周りの人の命を守ることができる。と考える。

そこで，体育や休み時間等を通して運動したり遊んだりして体力づくりをしていることが，災害時に役立つ体力に繋がると意識させ，これまでの運動やスポーツをする目標に加えて「防災体力」を身につけさせることをめざして研究に取り組んだ。

### 3 研究の実践

本研究は，山城小学校全校児童（53名）の協力を得て次のようなタイムラインを進めた。



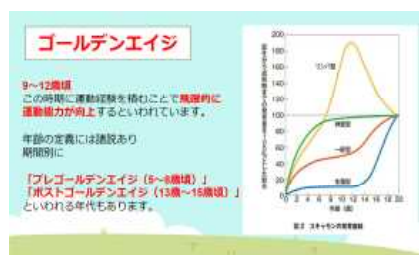
#### (1) 動機づけ

##### ① 「防災体力」を身につけることの意義について教職員への周知と共通理解

はじめに，教職員に対して共通理解を図るために職員会で「防災体力」という聞き慣れない言葉の説明と研究の方向性についての研修を行った。災害時に自分の命を守り，さらには家族や地域の人々の命を守ることができる「防災体力」づくりへの実践と協力について教職員と共通理解を図った。

運動することの大切さは，スキヤモンの発育曲線を参考にしてみると，幼児期からの約10年間に運動経験を積んでおくことの重要性が分かる。

次に，運動習慣について考えると，学校教育活動全般の中で行われる運動（受動的な取組）と，家庭や地域での運動（子ども自らの希望で自主的，もしくは保



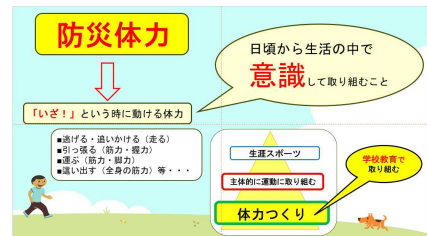
護者の希望等)に分けられ、二極化しているのではないかと考えた。

現代の子どもたちは、様々な要因から外遊びや運動する機会が減少している。さらに、変化が激しく不安定な社会情勢に加えて、異常気象や自然災害等が多発しており、中でも今後発生する確率が高く懸念されているのが「南海トラフ地震」である。子どもも大人も、どのライフステージに立っていたとしても、今後、災害時に備えた対策として「いざ!」という時に動くことができる体力や命を守ることができる力は必然であると考えます。

そこで、子どもたち一人一人が、主体的に体力づくりに取り組むことができる手立てとして「防災体力」をテーマに実践しようと考えた。

避難備品や避難場所の確認、避難訓練を行うことと同じように、避難するための体力づくりは、命を守るために欠かせない。遊びや運動を通して身につけた体力は、災害時に役立つ「防災体力」に繋がるということを、一人一人が「自分事」として捉えることによって、日頃から災害時を意識した体力づくりができ、主体的に運動に取り組む(子どもたちの主体性を育む)ことに繋がるのではと考えた。

協力していただきたいこととして、日頃から子どもたちが意識して体力づくりに取り組むことができるよう「体力アップ チャレンジシート」の活用と、普段からの「声かけ」をお願いした。



**めあて**

「防災体力」を身につけること

災害時の備えとして、備蓄品の準備や避難訓練と同じように「防災体力」を身につける。

そのための手立てとして、「体力アップチャレンジシート」を活用し、**自分に合った体力づくりをすること。**

※友達と比較するのではなく「自分事」としてどこまで取り組めるか。

②「防災体力」を身につけることの意義について子どもたちへの発信

ア 全校朝会で「防災体力」の必要性について発信

災害時に備え、備蓄品や避難訓練と同じように命を守るためには「体力」が必要であるということを全校朝会の時間に子どもたちへ発信した。日常の生活の中で「自分事」として捉え、意識して体力づくりに取り組むことができるように、今後数十年のうちに発生するだろうと想定されている「南海トラフ地震」を例に挙げ、歳月や数十年後の年齢を予想させ、より具体的にイメージしやすいように伝えた。災害時の備えとして、避難備品や避難訓練等が大切であることと同様に、避難するために「逃げる(走る)」、高台へ「駆け上がる」等の「体力」を備えておくことが大切であるということを説明した。

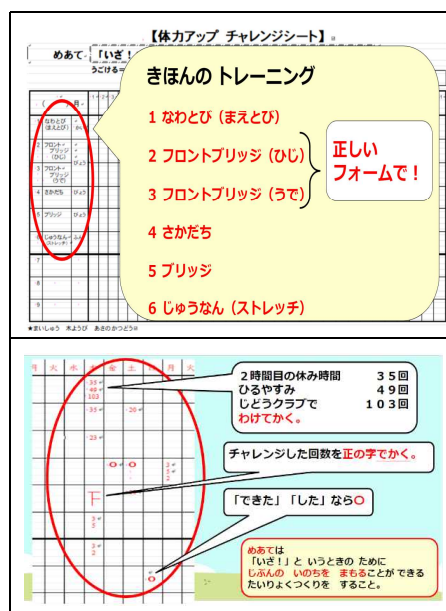
例えば、山城小学校は児童玄関へ来るまでに、長い階段を上らなければいけない。玄関から教室へ行くまで、また階段がある。日頃の習慣も、災害時に役立つ体力に繋がっているということ「意識」し、体力づくりを続けることの大切さを伝えた。

災害時に命を守るための体力づくりとして、一人一人が「自分事」として、日々継続していくことの重要性について話し、「1 意識する」「2 できることから始める」「3 続ける」以上3つの視点を伝え、「防災体力」づくり向けの意欲づけとした。



#### イ「体力アップチャレンジシート」と「基本のトレーニング」についての説明

朝の活動で「体力アップチャレンジシート」への記入方法と「基本のトレーニング」についての説明をした。主体的に運動に取り組む子どもをめざすため「体力アップチャレンジシート」は、自分なりに工夫して使いやすいように記入方法をいくつか挙げた。自分に合った使い方や記入方法を見つけながら使うことで、休み時間や家庭で自主的に体力づくりに励んでほしいと考えた。友達との比較や、できた数が多いことが良いのではなく、災害時に命を守るための体力アップであることを子どもたちと一緒に再確認した。チャレンジシートに基本のトレーニングを6つ組み入れ、災害時に必要であるだろうと想定した脚力、筋力、柔軟性を取り入れたメニューにした。「さか立ち」や「ブリッジ」等、マット補助が必要なトレーニングについては必ず体育の時間や朝の活動の時間等、教師や大人が付き添いの元で行うよう安全面に配慮した。



#### ウ「おしえてシート」を活用した実態把握（事前）

子どもたちの体力に対する認識を調査するために「おしえてシート」を活用し、アンケートを行った。

##### 【アンケート結果より】

#### 1 運動することは好きですか

運動が好きな理由として、【とても好き】や【どちらかというとき】、【好き】を選んだ子どもたちは、「楽しいから」、「体を動かすのが好きだから」、「みんなといっしょに遊べるから」、「体をきたえられるから」が多かった。また、「ストレスをはっさんすることができる」や「すっきりする」等、気持ち面での理由もあった。次に、【どちらかという



とにがて】の理由として「うんどうは少しにがてです。けどかんたんうんどうはすきです」や、【とてもにがて】の理由としては「けがをよくするから」という理由であった。

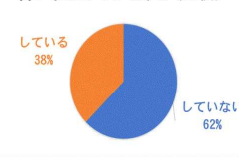
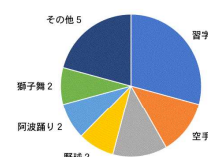
2 体力はつけていきたいですか

そう思う理由として、「げんきになるから」、「はしるのがはよくなるから」、「つよくなるから」、「体を強くするため」、「色々スポーツや運動がパッとできたらカッコいいから」等の理由があった。また、「防災体力」についての話をした後にアンケートを配布したこともあり、「さいがいのときにたすかるから」、「地しんとか、土しゃくずれとかおきたとき、体力があったら、すぐにげられるから」、「地しんや火じがおきたとき ひなんできるように」、「運動は、あまりすきではないが、さいがいがおきたときに 体力がないとにげられないから」等、災害時に体力が役立つことを記入していた子どもも多かったです。

3 休みの日には何をして遊んでいますか。

1位：ゲーム（32票） 2位：サッカー（10票） 3位：自転車（9票）、なわとび（9票）  
 ※全校としてまとめると、その他の中には、YouTube や TikTok, SNS, テレビ視聴等のメディア系がたくさん挙げられており、ゲームに続く多さであった。また、子どもたちの遊び全体から考察すると、一人でできる遊びの割合が多く、やはり少子化や遊び場の減少等の影響が関係しているということを改めて感じた。

4 何か習い事はしていますか。している人はしている習い事を教えてください

<p>習い事はしていますか(全校)</p>  <p>している 38% していない 62%</p>	<p>している習い事</p> 	<p>習字 (7) ・空手 (3) ・剣道 (2) 野球 (2)          阿波踊り (2) ・獅子舞 (2) ・その他 (5)</p>
---	--	--

「おしえてシート」の記述より、子どもたちが災害から命を守るためには「避難場所の確認」や「避難用品」を準備すること等に付け加えて、「避難するための体力」＝「防災体力」が必要であるということを理解することができたと考える。

○やっぱり体力をつけとかなないと一人でにげるときはにげれないから体力はつけないとにげれないと思いましたが。

やっぱり体力をつけとかなないと1人でにげるときににげれないから体力はつけないとにげれないと思いましたが。

じしんがくるまえにたいりよくをつけておきました。そのわけておいたためにたいりよくをつけておきました。

じしんがくるまえにたいりよくをつけておきました。災害からにげられるようにたいりよくをつけておきます。

今日山崎町は土砂災害が起るということが分りました。土砂災害が起る前にたいりよくをつけておきたいです。後、家族のたすか、おんぼろ所をたすかしておきます。こわいときは外で走って、たいりよくをつけて、災害からにげられるようにします。

後、おんぼろのとき、小さい子も助けられるようにしたいです。

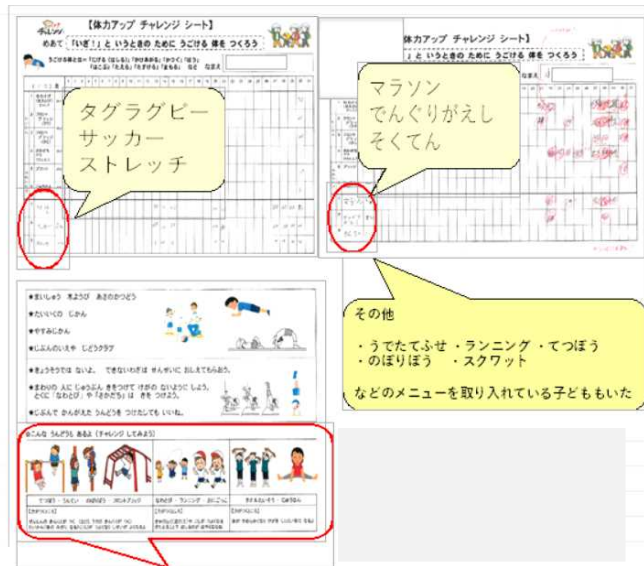
土砂災害が起る前に体力をつけておきたい。災害からにげられるようにします。小さい子も助けられるようにしたいです。

(2) 実践

① 「体力アップチャレンジシート」の活用

子どもたちが、「防災体力」への関心を高め、どこまで「自分事」として自主的に体力づくりに取り組むことができるかを把握するために、「体力アップチャレンジシート」を個人に持たせた。いつでも、どこでも体力づくりに励むことができ、実施したらすぐに記入できるよう工夫した。

また、基本の運動の他にも、遊具を使った運動や一人でできる運動を紹介した。「力がつくところ」として、どこの筋力が強くなるのかを記し、意識して運動に取り組めるよう工夫した。



☆こんな うんどうも あるよ (チャレンジ してみよう)

てつぼう・うんてい・のぼりぼう・フロントブリッジ	なわとび・ランニング・おにごっこ	タオルたいそう・じゆうなん
【力がつくところ】 せんしんの きんにくがつく (とくに うでの きんにくがつく) たいかん(体の みぎに なるところが) つよくなり せいが よくなるよ	【力がつくところ】 まやひやく(足の力)や こしが つよくなる きたえることで ほしものが はやくなるね	【力がつくところ】 体が やわらかくなり けがを しにりになるよ

「防災体力」を意識した 全校児童での体力づくり



② 「体力アップチャレンジシート」の工夫

「体力アップチャレンジシート」の活用から約 2 週間後、チャレンジシートの活用具合を把握するため、記入の仕方や学級での取り組み方等について各担任にアンケートを行い「体力アップチャレンジシート」の改善に生かした。

健康的な生活をするために、今週より「体力アップチャレンジシート」を活用して、ご家庭でも隙間時間に縄跳び、チャロントブリッジ、逆立ち、ブリッジ、ストレッチ、それ以外の運動(マラソン、腕立て伏せなど)に取り組んでいただきます。

家庭にも協力していただくために、保護者の方へのお知らせを添付して取り組んでいる学級があった。そうすると、保護者の方から新しいアイデアを提案してくださり、基本のメニューに付け加えて家族と一緒に実践している子どももいたそうである。

③ 山城町の被災より学ぶ

山城町は、これまでも大雨が降ると、国道が通行止めになったり、土砂災害に遭ったりしている。2018年6月～7月には大雨が降り続き、県西部では山城町の地区が被害に遭い集落が孤立した。そこで、身近で発生した災害について、当時の被災現場や避難状況の動画を視聴し、子どもたち一人一人が「自分事」として捉え、考える機会になるようスライドにまとめて配信した。



【動画を視聴した子どもたちの感想より】

いのがわたりたりすることがあるのをはじめてしました。さいがいはいつおこるかわからないからふたからぼうさいたいりよくをつけたい。

これから、ずっと体力づくりをがんばります。自分のいのちは自分でまもれるようにしたいです。

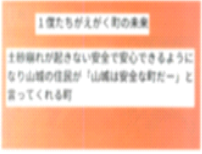
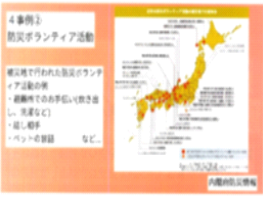

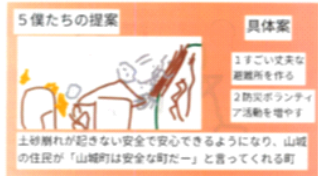
ちいきの人がみんなできょうりよくしあっていた。たいりよくアップをがんばります。

さいがいがあつたらみんなであるいてひなんしたいとおもいます。たいりよくアップをがんばります。

ひなんするためには体力がめちやくちやいると思いました。消防署の人かにおいで危険をさっしてすぐにひなんする行動をとったのがすごいと思いました。

④ 国語科の取組より

6年生では国語科「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」の単元学習の中で、「山城町の幸福論」として「僕たちがえがく町の未来」をテーマに調べ学習を行ったグループがある。子どもたちは、山城町の地形から土砂災害について調べ、安全で安心して暮らすことができる山城町の未来をえがいてプレゼンをした。子どもたち自ら、災害への意識が高まっていると考える。(以下、プレゼン資料一部抜粋)

 <p>① 僕たちがえがく町の未来 「山城は安全な町だー」と言ってくれる町</p>	 <p>③ 事例②では「防災ボランティア活動」を挙げ、実際に被災地で行われたボランティアの例を紹介している。</p>
 <p>② 「現在の問題点」として土砂災害マップを活用し、危険な箇所を示している。事例①として「防災・減災の取組」を挙げている。</p>	 <p>④ 結論では「すごい丈夫な避難所を作る」「防災ボランティアを増やす」であった。「防災体力」については、プレゼンの中に入っていなかったものの、山城町の地形の特徴を調べ、「安心して安全な生活」を子どもたち自身も望んでいることが分かった。</p>

⑤ 「中央構造線」や「南海トラフ地震」について学ぶ

災害発生から避難生活までのシミュレーション動画や、消防士さんの日頃の訓練の様子などの動画を視聴し、子どもたちや教職員と共有することで、「自分事」として防災への意識を高め、「防災体力づくり」に取り組もうとする意欲づけをした。

また、断層がずれることによって地震が発生することや、日本にある世界第一級の断層である、「中央構造線」が三好市を通過していることを伝えた。さらに、実際に上空から「中央構造線」が通っているラインを YouTube の動画を活用し確認した。内閣府が YouTube に挙げている『【子ども版】どうなる？どうする？南海トラフ地震への備え』を視聴し、南海トラフ地震に対する正しい知識と災害への備えについて学習した。また、大きな地震が発生した場合に「臨時情報」が出されることを学習し、次に発生すると想定される巨大地震に備えて早めに避難することや、その後の避難生活においても体力をつけておくことが重要であることを再確認した。

続いて、実際に災害現場で救助を行っている消防士さんは、どのような訓練や体力づくりをしているのか動画を視聴し、災害時に人命救助ができるよう、日頃から訓練やトレーニングを積み重ねていることを学んだ。冬休みの期間中に、家庭でも自主的に体力づくりに取り組むことができるよう、子どもたちへの意欲づけとして消防士さんと一緒に運動する動画を紹介した。



【中央構造線のルート】



【内閣府の動画】



消防士と一緒に家で運動しよう！  
City Ichihara  
チャンネル登録者数 3910人  
【消防士さんとの体操動画】

【動画を視聴した子どもたちの感想より】

<p>まず食べ物や水などいろいろな物 をしまひておきかいてすそ して、もしも自分の家の近くで いしんがおきたら、みんない いかなんして、びやんしてい</p>	<p>体力は、いつでもつようだと思います。 だんそうがもどる力でもしんがおきるので、 南シトラフヤリせしんつなみ、き大地しんは しょうがないですが、そのあとのこうどうおき 時のこうどうが分かりました。そして、それ</p>	<p>今日、まつそで、先生が、つなみを いしんが、おこったとき、きんご をみて、こんなにはげしいと て、思って、おぼて、かたか、あか きると、ま、つう、した、い、ま、お、お</p>
<p>いる人たちが、なにか、おし、おし おし、おし、おし、おし、おし、おし、 い、い、い、い、い、い、い、い、 そして、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、 い、い、い、い、い、い、い、い、 い、い、い、い、い、い、い、い、</p>	<p>をいかにして、自分の命は自分で守る。で、消 ほうし、の人たちが、していた、運動も、毎日、 回は、チャレンジを、する、ことを、い、い、い、い、 す。</p>	<p>冬、つなみ、おこった、とき、お、お、 家、か、た、た、た、た、た、た、た、 に、い、い、い、い、い、い、い、い、 お、お、お、お、お、お、お、お、</p>

おとしりのおばあちゃんや、  
おじいちゃんを助けてあげたい  
です。

自分の命は自分で守る

つなみとかじしんがおこったときのえい  
ぞうをみて、こんなにはげしいんだなっ  
て思ってた。冬休みにはおかあ  
さんの家のとちぎにかえるので、そのと  
きに、いとこたちもくるからいとこた  
ちともいっしょにしたいと思います。

⑥ 長期休業中（冬休み）の「防災体力づくり」への取組

長期休業中は、学習面においても生活面においても、子どもたちの自主性や主体性、また家庭の協力が必要である。「防災体力」についても、「災害時に備えるため」、「もしもの時のために」というめあてを忘れず、「自らが進んでどれだけ体力づくりに取り組むことができたか」という、子どもたち自らの「主体性」を試す良い機会であると考えた。そこで、「体力アップチャレンジシート」を冬休みの課題にした。先生方へのアンケートで得られたご意見を参考にし、「冬休みバージョン」として、シートの改善を行い、裏面にはストレッチや体幹トレーニング、筋力トレーニング等、おすすめの動画サイトをいくつか紹介し、長期休業中でも家庭で ICT 端末を活用した体力づくりに取り組めるよう工夫した。

★チューブでけんさくして みよう(どうが見ながら 体力づくりにちようせんしてみよう！)

↓

●「ストレッチ 子ども どうが」	おすすめ！ チャレンジどうが。
●「たいかんトレーニング 子ども どうが」	
●「きんりょくトレーニング どうが」	

●「子供持久力アップトレーニング」【子供向け】(4分8秒目タイマー付き)

# 「防災体力」づくりに向けた配信



話の内容で大切だと感じたことをメモし「かんそうシート」に記入している

冬休み中も進んで「防災体力づくり」に取り組むことができるよう内閣府の動画を活用し発信

2024年1月1日、16時10分頃、石川県能登地方で最大震度7を観測する地震が発生した。同時に、大津波警報や注意報が発表された。年末年始ということで、帰省していた人も多く、帰省中に被害に遭われた人も多くいたそうである。

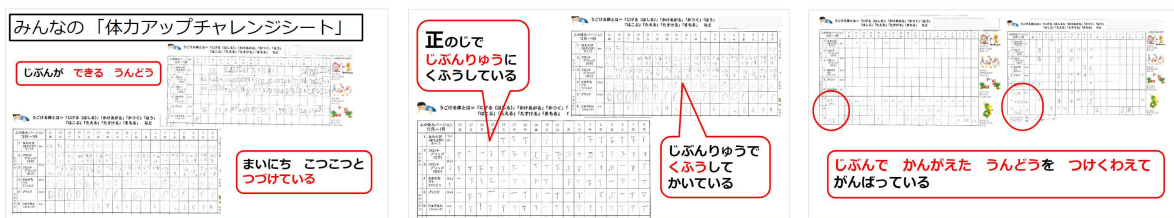
これまで「防災体力」について取り組んできた子どもたちは、今回の地震についてどのように考えたのだろうかと思い、3学期の始業式の後アンケートを実施した。

【能登半島地震をニュースで見た子どもたちの感想より】



子どもたちの感想より「防災体力」を身につけることは、災害時に「命を守る」という行動につながることや、今、自分たちが取り組んでいる体力づくりが「もしも」の時のために役立つということに気付いた等、日々の取組である「防災体力づくり」の大切さを、子どもたち自らが改めて実感したと考える。

(3) 振り返り



① 長期休業中の「体力アップチャレンジシート」から

冬休み中のチャレンジシートから、上記の3つのタイプに分類できた。1つ目は、「自分ができる運動を毎日こつこつと続けているタイプ」、2つ目は、正の字を書いたり時間を細かく書いたりして「自分流」で工夫しながら活用しているタイプ、3つ目は、基本の運動に「自分で考えた運動」を付け加えて実践しているタイプであった。子どもたち一人一人が「体力アップチャレンジシート」を活用し、「防災体力」を意識して取

り組むことができたと考える。しかし、毎日続けて体力アップに取り組むことが難しかったり、中には、全く実践できていなかったりした子どももいた。

また、学年や発達段階に応じた担任の声かけや、家庭との連携の重要性を感じた。家庭の協力を得ることで、より効果的に「防災体力づくり」に取り組むことができた学級があったので、お便りを通して家庭へ協力していただく等の工夫が必要であったと考える。「防災体力」を「自分事」として捉え実践することができるよう、今後は、子どもたちの「主体性」をどのようにして引き出すかということを考え、本来の研究目的である「主体的に」ということに重点を置き、さらに研究を続けていきたい。

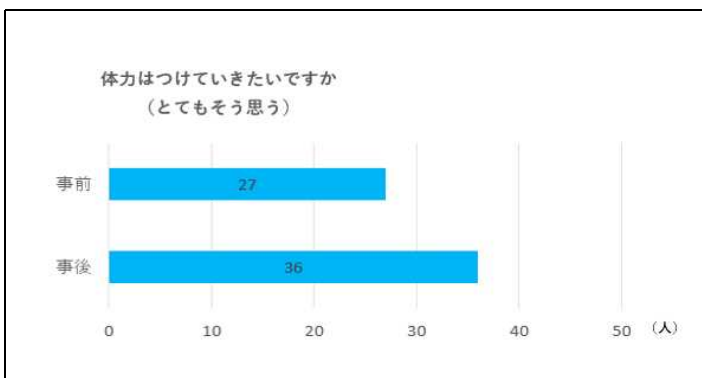
## ② 「おしえてシート」を活用した実態把握（事後）

地震発生から3週間経過した後、子どもたちが記入した冬休みの体力アップチャレンジシートや「能登半島地震」についての感想を、いくつか取り挙げスライドにまとめて紹介した。

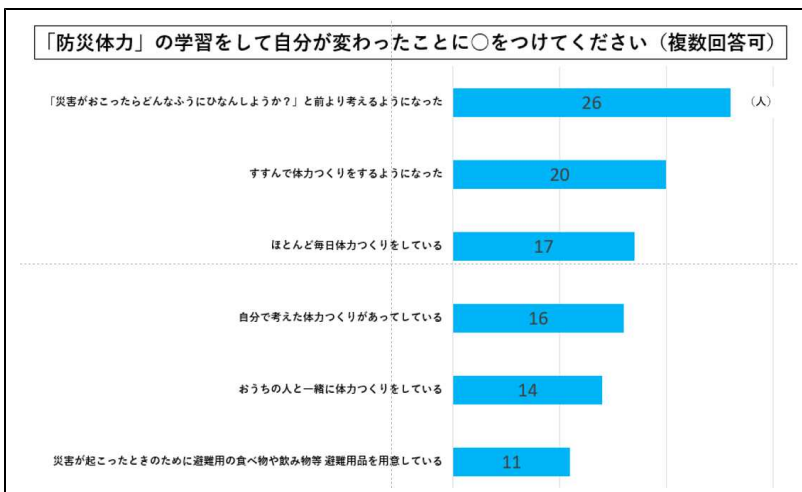
感想の中には、「体力づくりが、こんなさいがいの時に役だつたなと改めて思いました。」という感想が多くあり、災害時への備えのために「防災体力」が大切だということ、子どもたちと共有した。

## 4 結果と考察

### 【アンケート結果より】（事後：まとめ）

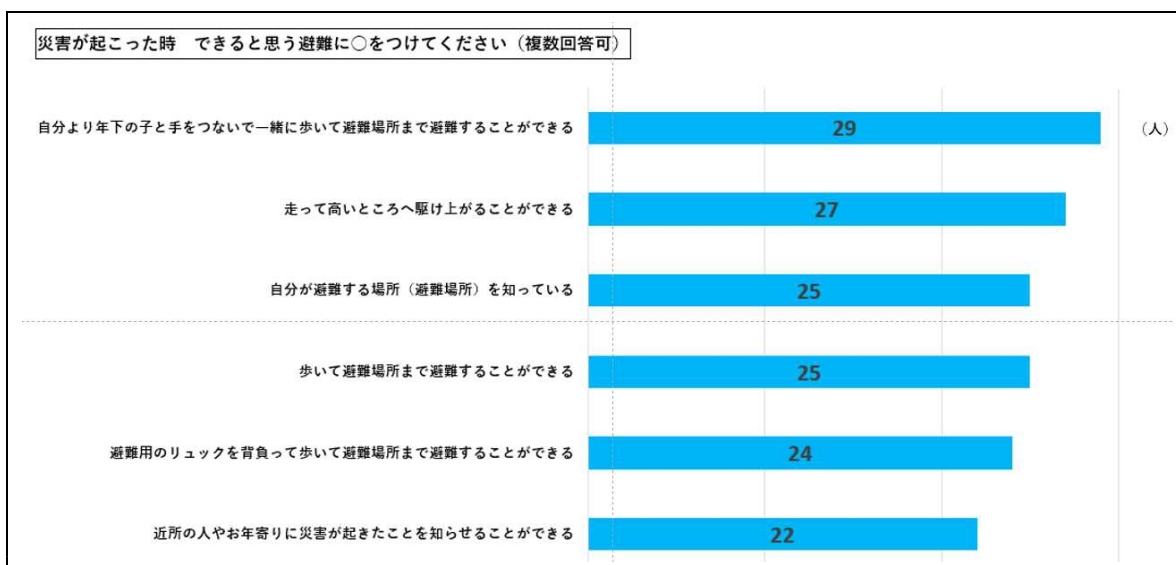


「体力はつけていきたいですか」の質問で、「とてもそう思う」と回答した子どもたちは、防災体力づくりに取り組む前より上がった。「事後」となっているが、2024年1月現在も「体力アップチャレンジシート」を活用した体力づくりは継続中であるため、今後の取組後の結果にも期待したい。

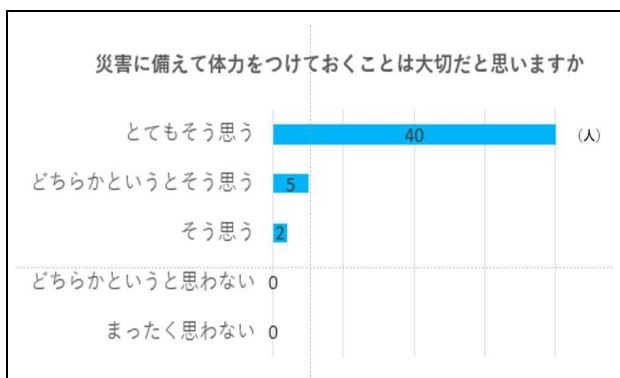


「防災体力」の学習で自分が変わったこととして多かったものが「『災害がおこったらどんなふうに避難しようか?』と前より考えるようになった」や「進んで体力づくりをするようになった」が上位を占めており「災害への意識」や「体力づくりへの意欲」が向上していると考えられる。

一方で、「おうちの人と一緒に体力づくりをしている」、「災害が起こったときのために避難用の食べ物や飲み物等、避難用品を用意している」については、回答が少なかったため、今後は、「防災」や「減災」への取組について、家庭への周知や連携が必要であるとする。



災害が起こった時できると思う避難については、「自分より年下の子と手をつないで一緒に歩いて避難場所まで避難することができる」が多かった。しかし、「近所の人やお年寄りに災害が起きたことを知らせることができる」については下位であったため、日頃から声を掛け合うことや、コミュニケーションの大切さについても、今後伝えていきたい。



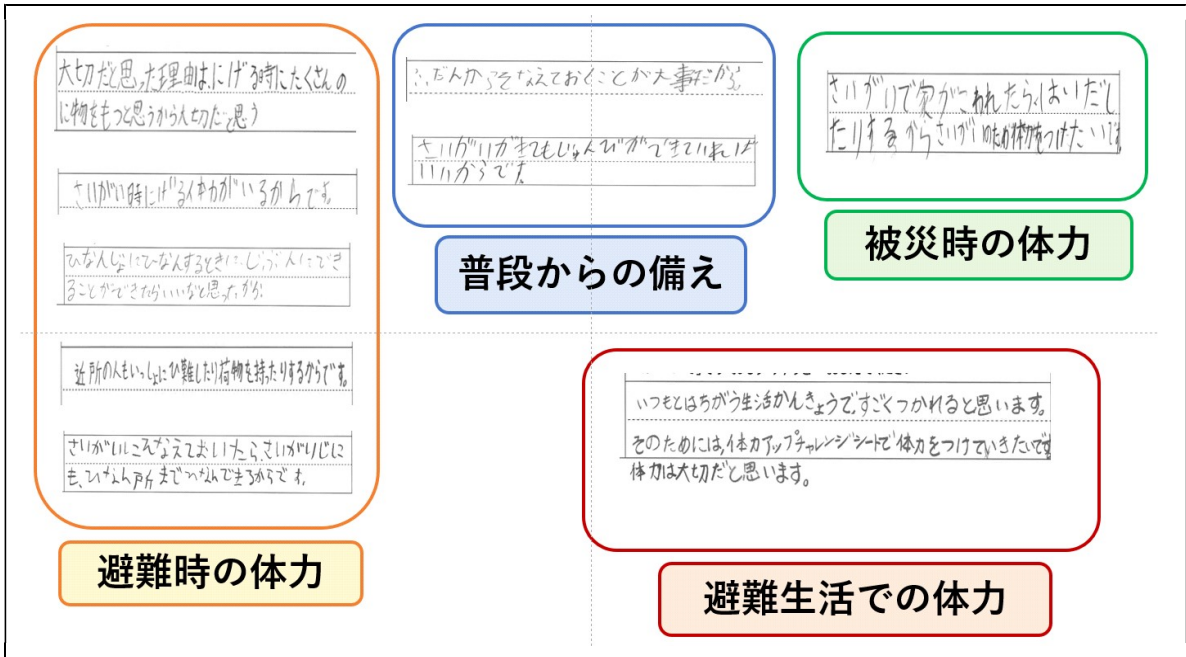
「災害に備えて体力をつけておくことは大切だと思いますか」の質問では、「とてもそう思う」と回答した子どもたちが一番多かった。逆に、「どちらかというと思わない」や「まったく思わない」と回答した子どもたちはいなかった。

「防災体力」について意見をまとめると

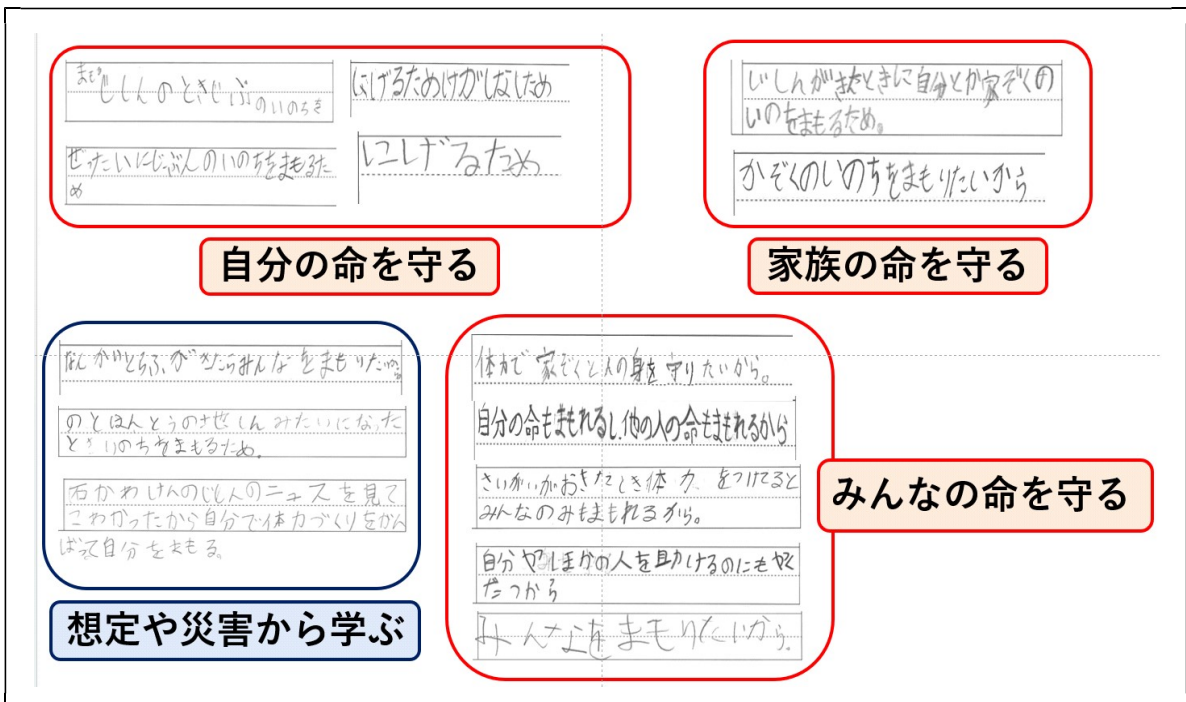
1	避難する時に必要な体力
2	普段から災害時を想定した体力の備え
3	被災した場合の体力
4	避難生活を想定した避難所での体力

災害に備えて体力をつけておくことが大切だと思う理由について、子どもたちの意見をまとめると、「避難する時に必要な体力」、「普段から災害時のために体力を備えておくこと」、また、もしも自分が被災した場合のことを想定した「被災時の体力」、「避難生活を想定した避難所での体力」等、子どもたちの意見から「防災体力」を分類すると4つにまとまった。





また、南海トラフ地震を想定した意見や、石川県能登半島地震の災害から学んだ意見も多くあった。



さまざまな意見が集まったが、どの意見にも共通していることは「命を守る」ということであった。自分の命だけでなく、大切な家族をはじめ「みんなの命を守りたい」という子どもたちの率直な願いから、やさしさや思いやりの心、また、強い決心さえ伝わってきた。

災害に遭った時、「防災体力づくり」で学んだことを思い出し、命を守る判断と行動を最優先し、たったひとつの命を大切にしたいと願っている。

## 5 おわりに

研究途中で「能登半島地震」が発生し、子どもたちは災害に対して、これまでよりさらに「自分事」としての意識が高まったのではないかと考える。

日頃の避難訓練では、校内や地域の防災マニュアルに沿って訓練をするが、災害は「いつ」「どこで」「誰といるとき」に襲ってくるか予測できない。今回の能登半島地震では、年末年始で帰省していた人や観光で滞在していて被害に遭われた人も多い。

子どもたちがどこで災害に遭っても、まず落ち着いて、日頃の避難訓練を思い出し、その時や場所、災害の種類や規模に応じて適切に判断し命を守ることを最優先にした行動をとってほしい。そして我々教職員も、「防災体力」を意識した体力づくりを日頃から心がけることが大切であると考え。災害時に子どもたちの命を守り、自分自身や大切な家族の命を守ることができる体力を身につけておきたい。

また避難することができても、その後の避難生活においては「水や食料を運ぶ」といった体力面だけでなく、集団の避難生活の中で「我慢すること」や「周りの人への気遣い」等が必要である。様々なことを具体的に想定すると、体力に加えて、「気力」や「精神力」も重要になってくると考える。

今回は、「防災体力」に重点を置き研究を進めてきたが、今後は、もしも自分や家族が被災した場合のことや、その後の避難生活についても考えを広げ、「体力面」に加えて「精神力（強い気持ち・心）」も大切であることや、日頃から地域の人と関わりをもち、繋がっておく等、コミュニケーションの大切さについても研究できればと考えている。

「防災体力づくり」と共に、学校の教育活動の中で「思いやりの心」や何事に対しても「感謝」の気持ちをもつことの大切さ等、道徳心を育むことが人間形成の基盤となると同時に、災害時に「生きる力」となって発揮することができるよう、さらに研究を進めていきたい。

## 6 参考文献

- ・ 口頭発表 04（科学的研究）  
第8回日本トレーニング指導学会大会 災害発生時に必要となる防災体力と体力要素  
片山昭彦 1、宮武伸行 2、神田かなえ 2 1 四国学院大学 社会学部、2 香川大学 医学部
- ・ 【西日本豪雨】 孤立の栗山集落5世帯10人避難 徳島新聞動画 TPV (Tokushima Press)  
<https://www.youtube.com/watch?v=m-KUAfmlKOW>
- ・ [明日をまもるナビ] 土砂災害の前兆！？消防団員が気づいたある異変 NHK  
<https://www.youtube.com/watch?v=Odlvd0zpkgo>
- ・ 中央構造線 を富士山の高さから マッハ 2.6 で見る（字幕対応） Takahashi Suzu  
<https://www.youtube.com/watch?v=TJ5IT3EnY8o>
- ・ 【子ども版】 どうなる？ どうする？ 南海トラフ地震への備え 内閣府防災  
<https://www.youtube.com/watch?v=-R5mnlLouqg&t=9s>
- ・ 【神業】 一人前の消防士になるには過酷な訓練が！ 凄すぎる消防士たち 神戸市消防局  
A Japanese fireman's 日本政治新聞 <https://www.youtube.com/watch?v=TFTdJlyIw4I&t=27s>
- ・ 消防士と一緒に家で運動しよう！ City Ichihara  
<https://www.youtube.com/watch?v=WkixnNxVvrk&t=9s>

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）

集	年度	内 容
30	平成 元	園外の地域環境を生かし、幼児の主体性を育てるための活動は、どのようにすればよいか 幼稚園第2ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし、児童一人一人に応じた指導をめざして －学校・家庭・地域が一体となって－ 池田町 下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む、豊かな教育活動」－ふるさと意識を高めるために－ 山城町 山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成－ボランティア活動を通して－ 井川町 井川中学校 へき地の特性を生かし、一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 －同単元類似内容の指導の試み－ 池田町 出合小学校 郡内家出少女についての考察 三好郡青少年育成センター 久原 啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ－児童・生徒の理解と援助のために－ 三好郡教育研究所員 入江 宏明
31	平成 2	ふるさととの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村 善徳小学校 教諭 徳善 之浩 体験を通して豊かな心を育て、実践まで高める道徳教育 三加茂町 三庄小学校 教諭 吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む、活力ある生徒の育成をめざして 池田町 池田第一中学校 教諭 小島 治子 西字小学校における生活科年間計画－平成4年度教育課程完全実施へ向けての新しい試み－ 山城町 西字小学校 教諭 内田三千代 英語指導助手（AET）とのティーム・ティーチングを通して －コミュニケーション能力の育成のために－ 池田町 池田中学校 教諭 木藤 康子
32	平成 3	主体的な生活を促す幼稚園教育－人とのかわりをとおして－ 第3ブロック幼稚園 池田町 川崎幼稚園 教諭 林 節子 馬場幼稚園 教諭 丸岡 明美 西山幼稚園 教諭 東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動－たて割り班の活動を通して－ 井川町 井内小学校 教諭 立川 義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 －進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指して－ 池田町 白地小学校 養護教諭 平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようなであればよいか－学校行事などの活動を通して－ 山城町 山城中学校 教諭 佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動－学習意欲を高める理科の指導－ 三好郡教育研究所員 藤本 智恵
33	平成 4	主体性を伸ばし、実践力を育てる特別活動 －個性を重視した、たて割りグループによる児童集会活動を通して－ 山城町 大野小学校 教諭 上田 優 へき地小学校における性教育についての研究－性教育の実践を通して－ 東祖谷山村性教育研究会 和田小学校 教諭 松村 直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して－体験的活動を通して－ 西祖谷山村 西祖谷中学校 教諭 篠原 一仁 中学校国語科書写における行書指導－行書を活用した筆写活動の日常化をめざして－ 三好郡教育研究所 研究員 岸 敬子
34	平成 5	健康でたくましい子どもの育成をめざして－主体的に取り組む活動－ 第3ブロック幼稚園 教諭 上林加津子 永田 協子 自然に感動し、主体的に学び続ける児童の育成 －一人一人の表現活動を高め、科学的な見方や考え方を育てる理科学習－ 三野町 王地小学校 教諭 安西 政和 自ら学び、自らきたえる心豊かな子どもの育成－ボランティア活動をとおして－ 三好町 昼間小学校 教諭 武岡 澄代

		奉仕等体験学習を通して、思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町 池田中学校 教諭 古林 久代 英語指導を通して平和教育をすすめる一私案 -ピース・メッセージの実践を通して- 三好郡教育研究所 研究員 長谷 郁代
35	平成6	地域に開かれた学校づくり -すこやかな児童の育成をめざした、地域ぐるみで取り組む学校行事- 山城町 大和小学校 教諭 久保 満男 小規模校における環境教育の取り組み -教科、特別活動の実践を通して- 池田町 馬路小学校 教諭 細川 敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして 三好町 三好中学校 教諭 玉木 利典 選択履修の幅の拡大 -家庭科- 三好郡教育研究所 研究員 佐々木待子
36	平成7	主体的な生活を促す幼稚園教育 -幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考える- 第4ブロック幼稚園 山城幼稚園 蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして -「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組み- 三加茂町 加茂小学校 教諭 小笠 健二 「郷土を愛し、心豊かな児童の育成を目指して」 -体験学習・ボランティア活動を通して- 西祖谷山村 吾橋小学校 教諭 濱口 久弥 生徒会活動の活性化をめざして -自ら考え、行動する生徒会活動への教師の支援- 三加茂町 三加茂中学校 教諭 山西 敏広 生活に生きる書写力の育成を目指して -中学1年生への意識調査と実践例- 三好郡教育研究所 研究員 栗田 典子
37	平成8	地域に根ざした福祉・ボランティア教育 -施設訪問を通して- 井川町 辻小学校 細川 文男 『ふるさとを愛し、人間として主体的に生きる生徒の育成』 山城町 大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 -「何について」「どのように」「どこまで」指導するか- 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
38	平成9	幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくりだすためには、環境を どのように構成すればよいか 第1ブロック幼稚園 教諭 宮成 典子 物やお金を大切に、思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町 三縄小学校 教諭 森本 明子 環境教育 Think Globally, Act Locally を目指して -積極的に環境と関わり、責任ある行動がとれる生徒の育成- 三野町 三野中学校 教諭 丸岡 美枝 学校不適應問題の諸相と教師の援助について 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 -ある不登校児とのかかわりを通して- 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
39	平成10	身近な環境に意欲的にかかわり、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童 の育成 山城町 政友小学校 教諭 大西公美子 一人一人の個性を尊重し、豊かな心と、『生きる力』を育むために -地域に育てられ、地域と共に伸びる生徒の育成- 東祖谷山村 東祖谷中学校 教諭 梶原真里子 今、子どもたちの心は? -三好郡内小中学生意識調査から- 三好郡教育研究所 研究員 吉岡 弘恵 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子
40	平成11	魅力ある幼稚園教育の創造 (三好町三園の取り組み) -生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成- 三好町内幼稚園 ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな子どもの育成 -名頃を見つめ、名頃を愛する学習を通して- 東祖谷山村 名頃小学校 教諭 橋本 隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きる力」を育む教育の創造 -「選択の時間」を生かした取り組みの中で- 井川町 井川中学校 教諭 内田 典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員 西井川小学校 吉岡 弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員 三好中学校 新居 信子

41	平成 12	<p>「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して、生きる力を育む王地学習 王地小学校 教諭 北川ひとみ</p> <p>自ら学び、自ら考え、主体的に行動する生徒の育成 -地域の特性を生かした取り組みの中で- 池田第一中学校 教諭 立花 久</p> <p>三好郡における情報教育の現状とその考察 -郡内小中学生・教職員の意識調査から- 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵 三好郡教育研究所 研究員 三好中学校 新居 信子</p>
42	平成 13	<p>「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 -幼児が自ら生活していくための教師の役割- 白地幼稚園 教諭 木徳 友子</p> <p>「ふるさとを愛し、共に学びあう心豊かな児童の育成」 -へき地の特性を生かした様々な体験活動をとおして- 東山小学校 教諭 高篠 佳子</p> <p>生きる力を養う生徒の育成 山城中学校 教諭 白井 正道</p> <p>TT授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料(平成12年度・13年度)から中学校数学に おけるTT授業について考察する 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵</p> <p>自ら学び、豊かな心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵</p>
43	平成 14	<p>豊かな感性をはぐくむ教育の創造 -金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおして- 三好郡教育研究所 研究員 西井川小学校 小角 昌美</p> <p>数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵</p> <p>地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 -学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワーク- 三好郡ネットワークセンターICTコーディネータ 中川 斉史 生藤 元</p>
44	平成 15	<p>生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 -身近なものに興味を持ち、活動を豊かにするためには、教師はどのようにかかわればよいか- 吾橋幼稚園 教諭 山口 里子</p> <p>「生きる力」を育む総合的な学習 -ふるさとを愛し、人や自然と積極的にかかわろうとする児童の育成をめざして- 出合小学校 教諭 岡 佳子</p> <p>「ふるさとを愛し、豊かな感性を持ち、自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校 教諭 富永 浩史</p> <p>「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ、個性を生かす指導について -人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるために- 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代</p> <p>生きる力をはぐくむ教育の探求 -「本との出会い」をとおして- 三好郡教育研究所 研究員 小角 昌美</p>
45	平成 16	<p>ふるさとの歴史や自然、文化にふれる活動を通して、自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校 教諭 高岡 和恵</p> <p>『地域から学ぶ「生きる力」の育成』 池田中学校</p> <p>「みる力」を育てる美術教育 -美術の基礎・基本をみつめて- 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代</p> <p>学校の情報化をどのように進めるか 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元</p>
46	平成 17	<p>幼稚園において、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、幼児の主体的な活動を確保 するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第1ブロック 三野町・三加茂町幼稚園研究グループ</p> <p>地域や学校の特性を生かし、一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校 教諭 鶴田 美枝</p> <p>地域や人に関わる体験的な活動を通して、自ら考える生徒の育成 三好中学校 教諭 野田 圭祐</p> <p>三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元</p> <p>文字式の指導に関する研究 -1年文字式における生徒の理解の仕方について- 三好郡教育研究所 研究員 上田 美恵</p>

47	平成 18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 -主体的により良く伝え合う力の育成をめざして- 西井川小学校 教諭 丸本 豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 -共に生きる町づくりについて考えよう- 三加茂中学校 教諭 玉木 利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状 三好教育研究所 研究員 生藤 元
48	平成 19	「健全な心身の成長をめざして」 -高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながら- 第2ブロック 三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」自らの食生活に関心を持ち、すすんで健康づくりに取り組む子どもの育成 -学校・家庭・地域の連携した取り組み- 池田小学校 栄養教諭 大西 欣美 「確かな学力」を身につけさせるために -プレゼンテーション能力の育成とICT機器の利用- 三野中学校 教諭 中川 悌二 「グラフを書くのは何のため？」 -何でもかんでも「%」からの脱却で、知的な分析を- 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 -子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えよう- 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「中学校理科におけるICT機器の活用」 -評価活動におけるマークシートの利用- 三好教育研究所 研究員 山田 泰弘
49	平成 20	ふるさとを愛し、ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 椋生小学校 教諭 谷川 智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 -『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心として- 東祖谷中学校 教諭 高崎 英和 授業カイゼンとICT活用 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 体育科における効果的なICT機器の活用について 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 -構成的グループエンカウンターを考え方を生かして- 三好教育研究所 研究員 石丸 秀樹
50	平成 21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして -人やものとのかかわりを深め、豊かな感性や思考力の芽生えを育てる- 山城幼稚園 教諭 山中あけみ 池田幼稚園 教諭 大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 -習得型学力から活用型学力へのステップ- 足代小学校 教諭 熊井 美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる 井川中学校 教諭 村上 郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 -小・中における英語教育の連携を目指して- 三好教育研究所 研究員 藤本 恒幸 授業におけるICT活用の促進についての課題 三好教育研究所 研究員 福田 ミカ
51	平成 22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 -人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求- 芝生小学校 教諭 小原 敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる 山城中学校 教諭 内田 清文 実物投影機の活用目的の明確化 -実物投影機利用意図の可視化を通して- 加茂小学校 教諭 福田 ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 -三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より- 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
52	平成 23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 -小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」- 大野幼稚園 教諭 谷本 紀子 地域から学び、ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 -学びを生かし、自らを表現できる佐野っ子をめざして- 佐野小学校 教諭 山田 知弘 人や地域とつながり、協働できる生徒の育成 -「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして- 西祖谷中学校 教諭 西岡ひとみ

		三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ 平成23年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 ーグループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業よりー	三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
53	平成24	家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり ー小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学びー 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 ーE S D（持続発展教育）の視点を取り入れてー 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 ー学級担任アンケート調査と研究授業よりー 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること	東祖谷小学校 教諭 森永 直美 池田中学校 教諭 丸岡 美枝 昼間小学校 教諭 山口 恭史 三好教育研究所 研究員 山下 達也 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
54	平成25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ー様々な体験活動を通じて、地域の人々や同年齢、異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究ー 地域とともにある学校をめざして ー地域の教育力を生かして育てる三庄っ子ー 生徒一人ひとりの思いが尊重され、つながりを大切にする活動を通して 複式学級における指導の充実を目指して I C T活用の推進と情報モラル教育	昼間幼稚園 教諭 佐藤 重美 三庄小学校 教諭 三好美智代 三好中学校 教諭 近藤 剛 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
55	平成26	家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践 ー多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践ー 豊かな心と、自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ー学校図書館を中心としてー 小中連携教育ー東祖谷小中学校の取り組み 複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業 社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫 ー討論活動を取り入れた授業づくりー	井内小学校 教頭 住田 克弘 三加茂中学校 教諭 山下ちづる 三好教育研究所 研究員 岡本 博一 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
56	平成27	自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成 ー地域との交流を通してふるさとの魅力再発見ー 出会いをつなぎ、自己を見つめ、自他の人権を尊重する生き方を求めて ー識字学級との交流を通してー 「読む知る感じる」読書環境をめざして ー学校図書館教育の実践と課題ー 児童・生徒の生活環境の改善を目指して ーネット端末（スマホ等）の使用時間を見直してー	箆蔵小学校 教諭 藤原 隆司 三野中学校 教諭 尾形 君代 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
57	平成28	地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成 ー様々な人とのかかわりや体験活動を通してー 「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題 関わりの中で主体的に学び豊かな感性を育む鑑賞教育 ー見て、考えて、表して、意見を交わすー	山城小学校 教諭 井上 清隆 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 三好教育研究所 研究員 宮成万寿美
58	平成29	変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成 ー身近な自然や人とのかかわりをとおして しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫ー 豊かな心を持ち、未来に向かって主体的に行動する子どもの育成 ー一人一人のちがいを認め、助け合う仲間づくりを通してー 社会科デジタル教材の開発と活用 ーI C Tの有効な活用をめざしてー 生徒の意欲関心を高め、豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて ー美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通してー	西井川幼稚園 教諭 元木 真砂代 王地小学校 教諭 濱口 ミエ 三好教育研究所 研究員 常村 淳 三好教育研究所 研究員 宮成万寿美

59	平成 30	<p>自らの命を守り抜くために主体的に行動する態度の育成 ～実践的な安全教育の取り組みを通して～  <small>昼間小学校 教諭 久原 有里</small></p> <p>生徒の意欲関心を高め、豊かな感性を育成する主体的な学びについて  <small>～美術科におけるデジタル教材の作成と活用を通して～</small></p> <p>三好教育研究所教育研究所 研究員 宮成 万寿美（現三野中学校）  <small>興味関心を高め、基礎学力向上に役立つデジタル教材の開発と活用</small></p> <p><small>三好教育研究所 研究員 常村 淳</small></p> <p>誰もが分かる、楽しい授業を目指して ～ICTの活用とUDを取り入れた授業の工夫～  <small>三好教育研究所 研究員 立花 志津</small></p>
60	令和 元	<p>小規模校における児童の資質・能力の育成 ～「何ができるようになるか」に焦点をあてて～  <small>白地小学校 教諭 小越 彩佳</small></p> <p>豊かなかかわり合いの中で、たくましく自立できる子どもの育成 ～15歳の旅立ちに向けて～  <small>東祖谷中学校 教諭 西野 猛</small></p> <p>オリンピック・パラリンピックを活用した教育  <small>三好教育研究所 研究員 中瀧 由紀</small></p> <p>安全で楽しい理科の観察・実験  <small>三好教育研究所 研究員 立花 志津</small></p>
61	令和 2	<p>豊かな体験活動から学びを拓き、深める吾橋教育 ～へき地・複式・小規模校の特性を生かして～  <small>吾橋小学校 教頭 井上 清隆</small></p> <p>表現リズム遊び・表現運動の指導の現状 –調査から分かったこと、研修会で学んだこと–  <small>三好教育研究所 研究員 中瀧 由紀</small></p> <p>小学校の授業で活用できるプログラミング教育教材  <small>三好教育研究所 研究員 橋本早弥香</small></p>
62	令和 3	<p>子どもの姿から考える幼小の接続について ～遊びから学びへ向かう子どもたち～  <small>三縄幼稚園 主任教諭 真鍋 友子（現白地幼稚園）</small></p> <p>持続可能な食環境(食育ベース)の構築と「食の力」を身に付けた児童の育成  <small>～「マスク・手洗い消毒・3密を避ける」だけじゃない！！『体の中からコロナ感染予防対策』～</small>  <small>辻小学校 教諭 大岩 彩菜</small></p> <p>低学年における「平仮名・片仮名」の読みの流暢性を目指して  <small>三好教育研究所 研究員 上野三千代</small></p> <p>プログラミング教育の普及と指導方法の探究 ～2年間の実践研究を終えて～  <small>三好教育研究所 研究員 橋本早弥香</small></p>
63	令和 4	<p>ポジティブな行動支援の手法を活かした授業改善の取組  <small>～「わかった」を「できた」にする算数科の授業づくり～</small>  <small>加茂小学校 教諭 久原 有里, 教諭 森長 拓哉</small></p> <p>低学年における平仮名・片仮名の効果的な指導について  <small>～2年間の研究を通して～</small>  <small>三好教育研究所 研究員 上野三千代</small></p> <p>コミュニケーションを意識した英語力の向上にむけて  <small>～「十分に慣れ親しむ」ために～</small>  <small>三好教育研究所 研究員 リーデル章代</small></p>
64	令和 5	<p>小規模校の特性を生かした教育活動の推進  <small>～他校とのオンライン学習の実践を通して～</small>  <small>馬路小学校 教諭 中山 祐子</small></p> <p>変化する社会の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方  <small>～心豊かにたくましく生き抜く『人財』を育む教育活動～</small>  <small>三好市立井川中学校</small></p> <p>外国語学習から『学級づくり』  <small>～外国語の特性であるコミュニケーションを生かして～</small>  <small>三好教育研究所 研究員 リーデル章代</small></p> <p>主体的に運動する子どもの育成  <small>～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～</small>  <small>三好教育研究所 研究員 松本 美穂</small></p>